第Ⅴ章　下原遺跡の陥穴状土坑とその周辺

―愛鷹・箱根山麓を中心として―

はじめに

平成３年度に始まった東駿河湾環状道路に伴う発掘調査は、いままでに４遺跡の本格的調査を終了し、現在整理を続行中である。その中で共通した遺構の検出をみた。表題にあるところの陥穴状土坑である。これは^{14}Ｃ年代で約27,000年前という年代が与えられる岩宿（旧石器）時代に作られた遺構である。現在までに三島市教育委員会からの調査報告例を含め、60基以上が発見されている。愛鷹・箱根山麓において初めてこの遺構が報告されたのは、昭和62年に調査が始まり、現在も継続中である初音ヶ原遺跡群である。この遺跡では昭和63年に13基の列状に並ぶ遺構を検出した。その規模や計画性は当時の集団の在り方を考えるのに重要な要素となり得るため、全国的にも大きな関心を呼んだ。その後、初音ヶ原の陥穴状土坑は、他の地方での検出例が報告されないことから特異であるとされてきた。ところが東駿河湾環状道路に伴う調査が展開される中で、同様の形態をもつ土坑が標高の違う同じ尾根上や別の尾根で発見されはじめ、この時期に箱根西麓に多く作られた遺構であることが理解されてきた。このような状況の中で、各報告書に記載されている事実を元に、自然科学分析の分野も交えて、この時期の土坑について立体的な解明を試みたものが今回の編である。

本章を執筆するにあたり、平成４年に焼場遺跡Ａ地点の現地指導をお願いしてから、平成７年まで各遺跡の土坑について指導をいただいた京都文化博物館の鈴木忠司氏を座長に、土坑覆土の分析調査をお願いした辻本崇夫氏を該期遺構の専門家として迎え、発掘担当者とグループを編成しテーマに取り組むこととなった。第１回の会合は平成６年秋に、下原・加茂ノ洞Ｂの２遺跡の現地で土坑の形態や覆土の観察を行い、平成７年２月に具体的なテーマを設定し、執筆分担を決定した。その後、各人がテーマに取り組みながら、資料の集成を行い平成７年秋にその検討、互いの認識について集団討議してきた。それぞれの活動場所が離れていることから、会合がなかなかもてない状況ではあったが、電話や手紙の交換を間に挟んで、都合４回の会合を繰り返し、今回掲載することが可能となった。　（伊林）

第１節　静岡県下の陥穴状土坑

１　愛鷹・箱根山麓における層序

愛鷹山・箱根山はともに約40～50万年前に噴火活動を開始したと考えられており、現在は愛鷹山は死火山、箱根山は大湧谷などで一部活動がみられるものの死火山と考えられている。両山ともその活動を停止してから、雨水などの浸食を受け谷が形成され、その地形は複雑に変化したが、大きな改変は行われずにきた。愛鷹山麓は昭和30年代まで大部分が山林か茶畑であったのに対し、箱根山は古くから畑地として利用され、天地返しによって、遺物の表面採集が盛んに行われた。遺跡の分布は愛鷹山麓は東南麓、箱根山麓は芦ノ湖西南方向のともに緩斜面に集中している。両山麓の土壌の堆積状況は類似しており、現在確認されている最深土層は４万年前に流出したとみられる箱根新期軽石流である。

東名高速道路の建設に伴い、愛鷹ローム団研グループにより、愛鷹山におけるローム層の研究が開始された。そこで立川ローム層に対比される上部ローム層の層序の記載が行われ[(1)]、現在使用している休場層（ＹＬ）や第Ⅰ～第Ⅳスコリア層の枠組みが定められた。その後の考古学的発掘調査が実施される中

で黒色帯についての名称が決められていった。箱根西麓については、数々の発掘調査が行われる過程において、徐々に愛鷹山麓の層序に対比できることが明らかになってきたが、現在のところＳＣⅢ層以下については対比不可能な状況である。

両山麓は箱根・古富士火山が噴出した夥しい火山灰が堆積しており、スコリア帯と黒色帯が互層を成している。その成因については多くの検討がなされている。スコリアの降灰の成因は、その大部分を供給した古富士火山の南側に両山麓が位置しているため、南側火口の噴火の際には、短い時間で、スコリア層を形成する可能性が高い。一方偏西風の影響を神奈川県西部より受けにくい両山は、比較的軽量なロームの度重なる降灰が少なく、一時的に火山灰に埋もれたとしても自然植生の蘇生は早く、草木が繁茂し、その腐植物が沈殿して形成されたものが黒色帯であるという見解が現在のところ一般的である。それを裏付けるように遺物は黒色帯から出土することが多く、スコリア帯から石器ブロックが検出されることは少ない。

現在使用されている愛鷹・箱根山麓の層準[(2)]について、以下に概略を述べる。

表土

耕作土、腐植土等を示す。

富士黒色土層（ＦＢ）

縄文時代の遺構・遺物包含層となる。時期としては早期～前期の遺物が出土することが多い。斜面では発達が弱く、色調が淡いところもあるが、全体的には黒褐色を呈し、色調によっては２層に分けられるところもある。

休場層（ＹＬ）

岩宿（旧石器）時代の遺跡としては全国初の国指定遺跡となった、沼津市・宮本にまたがる休場遺跡にちなんで命名された層である。スコリアによって３層に分層でき、それぞれ上層（ＹＬＵ）、中層（ＹＬＭ）、下層（ＹＬＬ）と呼称している。これまでの数々の調査から、ＹＬＵは縄文時代草創期の遺物を一部包含することが報告されている。旧石器時代終末期の遺構・遺物は、ＹＬＭで主に検出されている。14,300±700年B.P.。

休場層直下黒色帯（ＢＢ０）

当初からＹＬＬ層下部に黒色帯が認識されており、ＹＬＬＢとも呼称されてきた。層厚・発色ともに薄い。

第Ⅰスコリア層（ＳＣⅠ）

赤褐色スコリア帯で箱根西麓では層状に確認できず、ブロック状に散在する。17,000～18,500年B.P.。

第Ⅰ黒色帯（ＢＢⅠ）

黒褐色硬質スコリア質土で、直径0.2～0.5㎝の橙色・黄色・黒色スコリアを含有する。^{14}Ｃ年代測定によれば18,030±450年B.P.の値が出ているが、層厚からかなりの時間幅をもつと考えられる。

ニセ・ローム層（ＮＬ）

実際には風化の進んだ暗黄褐色のスコリア層で、遠方からこの層をみるとローム層に見えることからこの名がつけられている。箱根西麓では２層に分層できる地点もある。姶良・丹沢広域火山灰（ＡＴ）が中位からやや下で観察できる。

第Ⅱ黒色帯（ＢＢⅡ）

黒褐色スコリア質土で、直径0.1～0.5㎝の橙色スコリアを含み、黄色・黒色スコリアも少量認められる。

第Ⅱスコリア層（ＳＣⅡ）

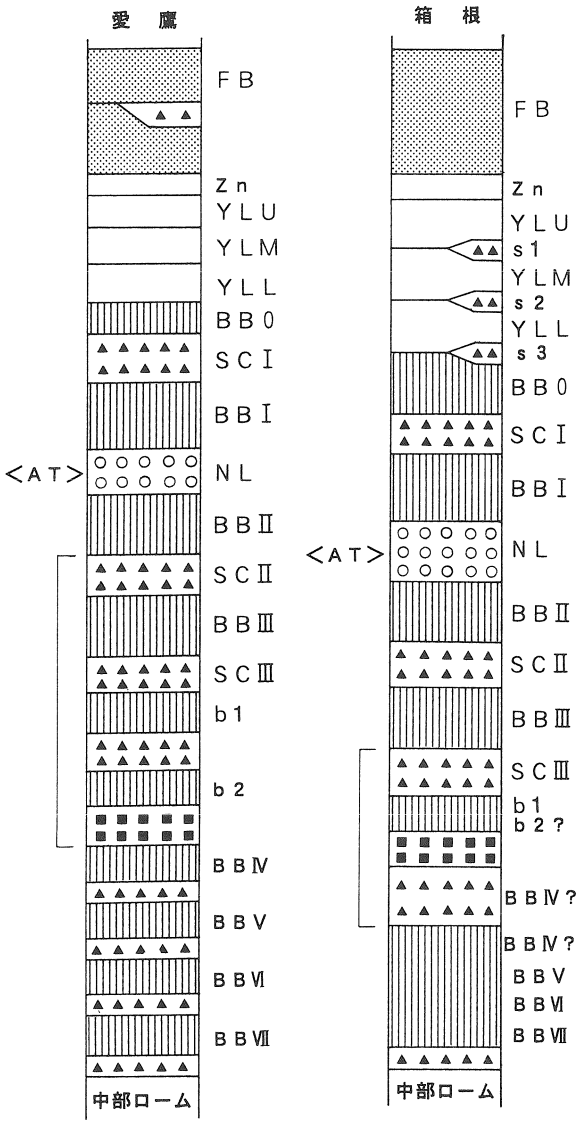
暗黒褐色スコリア層で、直径0.1～0.5㎝の橙色スコリアからなる。愛鷹では比較的明瞭に視認できるが、箱根山麓ではブロック状に散在する程度で、上下層のＢＢⅡ・Ⅲ層の分層が困難である場合が多い。

第Ⅲ黒色帯（ＢＢⅢ）

黒褐色スコリア質土で、ＳＣⅡに類似する直径0.2～0.8cmの橙色スコリアを含む。箱根山麓で検出される陥穴状土坑の掘り込み面と推定される層である。

第Ⅲスコリア帯（ＳＣⅢ）

この層より下部層位については愛鷹・箱根両山麓では層順に差違がみられる。ＳＣⅢ層は１ｍ近い層厚をもつ。愛鷹では黒色帯が２層、箱根では１層観察でき、その下に非常に硬質な黄赤褐色スコリア層（ＳＣⅢｓ４）がブロック状に散在する。大規模な火山活動が起きたことを物語っている。愛鷹山麓ではこれより下層ではスコリアと黒色帯の互層によって第Ⅶ黒色帯まで確認されているが、箱根山麓では明瞭なスコリア層が確認できず、黒色帯の発達も弱く、全体的に圧縮された様子が窺える。その相違については検討中であるが、愛鷹山が富士火山に近く、スコリアを降下させたのに対し、軽量なローム が緩やかに降下し堆積した箱根山麓の地形的相違によるものという見解がある。28,100±400年B.P.。　（伊林）



第16図　愛鷹・箱根山麓の層序

２　県下の岩宿（旧石器）時代の陥穴状土坑

静岡県下における土坑の集成は、加藤学園考古学研究所研究報告20「先史時代の陥穴について―静岡県を中心に―」[(3)]において報告されたものを最初とする。そこでは、研究史、特徴、形態分類、一覧という項目でまとめられており、1992年までの県下の陥穴についてはほぼ網羅されているといってよい。今回、あらためて調査を実施した結果、発掘担当者と集成者の認識に齟齬が生じている部分があったが、底本としての価値は高く、参考にさせていただいた。

県下の旧石器時代の遺跡は、愛鷹・箱根山麓と磐田原台地の３ヶ所に集中する。そのうち陥穴が検出された遺跡は、前掲書「表12　静岡県下陥穴状土坑一覧表」によれば以下のとおりである。

久根ヶ崎（田方郡韮山町奈古谷久根ヶ崎）　１基
初音ヶ原（三島市谷田初音ヶ原）　１３基
西願寺Ａ（駿東郡長泉町下長窪字西願寺）１２基
子ノ神（沼津市大岡字子之神）　３基

中見代（沼津市足高字尾ノ上）　　２基
寺谷（磐田市寺谷字寺谷原）　　２基
広野北（磐田郡豊田町大字高見丘）　　１７基

このうち、西願寺および中見代の２遺跡については今回の再調査によって、旧石器時代の遺構ではないことが判明した。さらに沼津市大谷津では10基の土坑が岩宿時代のものとして報告されているが、縄文時代の可能性があるので除外した。

1992年以降の調査で新たに検出された遺跡は、以下のとおりである。

初音ヶ原（三島市谷田初音ヶ原）	ＡＴ下（ＢＢⅢ）	２９基（1996年現在）
焼場（三島市川原ヶ谷字五百司）	ＡＴ下（ＢＢⅢ）	２基
下原（三島市塚原新田）	ＡＴ下（ＢＢⅢ）	７基
加茂ノ洞（三島市沢地字河洞）	ＡＴ下（ＢＢⅢ）	１７基
八田原（三島市沢地字八田原）	ＡＴ下（ＢＢⅢ）	７基
柏葉尾（沼津市大岡字柏葉尾）	ＡＴ上（ＹＬＭ）	２基
匂坂中下４（磐田市匂坂中下）	ＡＴ上	２基
高見丘Ⅲ・Ⅳ（磐田郡豊田町高見丘）	ＡＴ上	１０基

陥穴状土坑は、初音ヶ原遺跡群から検出されたものが半数、東駿河湾環状道路に伴う調査によって検出されたものが半数を占め、その数は増加の一途をたどっている。なお初音ヶ原遺跡群は、調査継続中であるため、さらに数は増える可能性がある。

これらの遺構を詳細にみると、ＡＴ下と上に分けられる。初音ヶ原・焼場・下原・加茂ノ洞・八田原の５遺跡の陥穴はいずれもＡＴ下のＢＢⅢ層の時期に掘削されたもので、検出層位もＳＣⅢ層で共通している。その他のものはＡＴ上で、ＹＬ層中に構築面があると考えられている。

刊行された調査報告書より、これらの遺跡の概要と遺構について以下に概説する。　　（伊林）

（１）愛鷹・箱根山麓の遺跡（第17・36・39図）

初音ヶ原遺跡群（第18～20図）

三島市東部は箱根外輪山西麓に含まれ、古箱根火山の原地形面が軽石流堆積物や降下テフラに覆われている地域である。その結果として著しく緩慢な傾斜面を形成している。初音ヶ原遺跡群は平坦な丘陵地帯にあり、北側には山田川、南側には夏梅木の支流が流れ、高低差40m程の谷を形成している。便宜上、国道１号線の北側をＡ遺跡、南側をＢ遺跡と呼称し、全体を遺跡群として捉えている。

遺跡は都市計画道路建設および住宅地造成を契機に、昭和63年前半期に調査された初音ヶ原Ａ遺跡第２地点[4]・Ｂ遺跡第１地点ではＢＢⅢ層より陥穴が合計13基検出された。国道１号線によって分断されているが、両地点の関連性は強く、列を意識しているものと思われる。平成７年現在も調査中で、これまでに29基が検出されており[5]、最新の調査では加茂ノ洞Ｂ遺跡と同じく、列状をなしているが、配置がランダムなパターンも確認されている。

下原遺跡[6]（第21～25図）

初音ヶ原遺跡の立地する尾根を約0.6km北西に上がった、標高125mの丘陵上に位置する。ここではＡＴ層の上下に陥穴状土坑が検出されている。

ＡＴ層より上層のものはＹＬ層の全面調査を終了したところ、ＢＢ０層において４基が検出された。覆土の上層はＹＬＵ層相当のもので、覆土中より有舌尖頭器が出土しているため、縄文時代草創期のものと考えられている。平面形は楕円で、底部には４～９ヶ所の逆茂木の痕跡が確認された。尾根の平坦

部を斜めに横断するように配されている。

ＡＴ層より下層のものは７基が検出され、トレンチによって明らかにＳＣⅡ層が土坑を被覆し、ＢＢⅢ層中に土坑の掘り込み面があることが確認された。平面形は円形を呈し、ラッパ状に開口部は広がる。土坑の底部には黒色の粘性土が堆積し、ある一定の時間この土坑が開いていた状況を示す。この７基の土坑は尾根の平坦部を斜めに横断するように配されている。またＢＢⅢ層からは石器ブロックが出土している（詳細は第３節）。

表３　下原遺跡縄文時代土坑計測表

土坑番号	長径(ｃｍ)	短径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	109	84	57
2号	90	56	77
3号	100	78	75
4号	113	68	70

表４　下原遺跡岩宿時代土坑計測表

土坑番号	長径(ｃｍ)	短径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	104	73	162
2号	110	109	145
3号	138	133	173
4号	132	126	176
5号	113	101	142
6号	145	138	152
7号	134	127	167

焼場（やきば）遺跡Ａ地点[7]（第26・27図）

山田川が開析した谷を挟んで、初音ヶ原遺跡群・下原遺跡の立地する丘陵の北西側に位置する。陥穴状土坑の検出された位置からは下原遺跡が眺望できる。平成４年度に調査が行われ、陥穴状土坑は遺跡中央部に設定した幅２ｍのトレンチ内から検出された。初音ヶ原遺跡群から検出されたものと形態が酷似していたことから、箱根西麓における２例目の検出例となった。初音ヶ原のものが列状を成していたことから、周囲をＢＢⅢ層まで重機で掘削したのち、土坑の検出と石器ブロックの検出に力を注いだ結果、南西に約６ｍ離れた地点から２基目が検出された。初音ヶ原との相違点は、初音ヶ原が蒲鉾状の平坦な場所に掘削されているのに対し、焼場は幅約40ｍの狭い尾根上に掘削されていることと、基数が２基と少ないことであろう。

加茂ノ洞（かもノほら）Ｂ遺跡[8]（第28～32図）

平成５年に第１次調査、翌６年に本格的調査を実施した。丘陵が標高を下げていきながら、侵食による浅いなだらかな谷を形成する地形の末端部に位置する。西側と北側に深い谷が形成されている。検出された土坑は17基で、いずれもＢＢⅢ層のものと考えられる。規模、形態は初音ヶ原・焼場遺跡と同様であるが、その配列に特徴が見られる。２列を意識した配列で、東側は初音ヶ原同様、間隔をほぼ同じに保ちながら、直線的に配置されている。西側は密に配置され、規則性は見いだせないが、東側の列と並行する。また土坑構築面であるＢＢⅢ層からは石器ブロックが検出されている。加茂ノ洞Ｂ遺跡の調査によって、初音ヶ原遺跡群の検出例が特異なものではなく、箱根西麓ではＢＢⅢ層の時期にかなり多く掘削されている可能性が高まり、土坑一つ一つの検討とともにその用途や立地について検討することとなった。

八田原（やたはら）遺跡（第33～35図）

平成７年に調査を実施した遺跡で、加茂ノ洞遺跡とは沢地川が開析した谷によって隔てられた、尾根の頂部の平坦部に立地する。検出された土坑は７基で、いずれもＢＢⅢ層のもので初音ヶ原遺跡等と同一規模、形態である。土坑は幅30ｍほどの尾根の平坦部を斜めに横切るように配されている。

表５　加茂ノ洞Ｂ遺跡土坑計測表

土坑番号	長径(ｃｍ)	短径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	105	99	113
2号	97	89	102
3号	107	90	109
4号	101	86	97
5号	102	94	101
6号	97	91	100
7号	105	92	127
8号	124	111	136
9号	91	84	107
10号	108	103	139
11号	111	98	128
12号	112	106	125
13号	111	96	106
14号	106	94	116
15号	107	95	95
16号	104	94	109
17号	88	84	106

表６　八田原遺跡土坑計測表

土坑番号	最大径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)	土坑番号	最大径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	162	122	5号	164	128
2号	140	142	6号	144	128
3号	138	146	7号	152	136
4号	126	134			

久根ヶ崎遺跡(9)（第37・38図）

箱根山麓の放射台地の一つである大仙山からのびる小台地の末端部に立地する。台地の西側は柿沢川の氾濫原で遺跡との標高差は４～５ｍにすぎず、現在は水田が広がる。周辺は縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が多く存在し、主に集落域となっている。遺跡の調査は温泉旅館の改築に伴って平成４・５年に調査された。

土坑は１基検出されており、トレンチによって西側は破壊されているが、平面形は直径１ｍほどの円形を呈し、底部には小穴が確認された。覆土は赤色スコリアを含む黄褐色土層が堆積しており、調査者はこの土坑の帰属をＹＬ層相当としている。土坑が検出された北西のＹＬ層からは剥片が検出された。

子ノ神遺跡(10)（第40・41図）

一般国道246号線裾野バイパス建設を契機に、昭和55年７月から翌年３月まで、本格的調査が沼津市教育委員会によって実施された。愛鷹山から放射状に延びる丘陵は、標高200mほどのところから急に穏やかになり枝分かれをしているが、子ノ神遺跡は比較的平坦な尾根上に立地し、標高は64～68mである。旧石器時代の文化層は３層で確認されており、土坑はそのうち第Ⅲ文化層（ＢＢ０層～ＳＣＩ層）で検出されている。

検出された４基の土坑は形状・規模がまちまちではあるが、立ち上がりが垂直に近いという共通点を持つ。掘り込み面は不明で、時期を決定しうる遺物の出土もないが、３号土坑の断面をみると、明らかに休場ローム層上面以下の切り込みであることがわかる。したがって、報告者の見解を踏襲して旧石器

時代の土坑であると考えた。

その用途について、「貯蔵穴あるいは陥穴と考えられるのであるが、積極的な根拠を欠く」と述べ、寺谷遺跡の報告書における見解を引用し「極めて生産性の低いと予想される先土器時代に果たしてこのような貯蔵穴が存在していたであろうかという疑問」を投げかけ、「むしろ小動物捕獲のための陥穴とした方が良いように思われる」と述べている。続けて「この時期の同種の遺構は類例に乏しく、早急な結論は避けるべきであろう。今後の類例の増加を待って検討される問題であろう」と結んでおり、慎重な見解である。

表７　子ノ神遺跡土坑計測表

土坑番号	長径(ｃｍ)	短径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	115	50	23
2号	90	80	70
3号	115	70	77

柏葉尾遺跡[11]（第42・43図）

沼津市教育委員会が平成７年１月より３月まで調査を実施した。現在整理中であるため、詳細は報告書刊行を待つこととするが、現時点で判明していることについて記載しておく。

子ノ神遺跡の北東、標高68mの台地上に立地しており、調査面積約1,200㎡である。土坑は４基検出された。プランは楕円形のものと円形のものがある。深さは比較的浅い２号土坑を除くと70㎝前後である。覆土上層がＹＬ層に相当することから、ＡＴより上層の遺構となる。　　（以上、横山・伊林）

（２）磐田原台地の遺跡（第44図）

磐田市の北部に位置する磐田原台地は、諏訪湖を源とする天竜川による大量の土砂が堆積して形成した台地である。南北約12㎞、東西約４㎞の広がりを有する。昭和32年（1957年）をピークとして旧石器時代の遺跡・遺物の探索が行われ数十地点で石器が発見された。昭和35年（1960年）に池端前遺跡が調査され、沼津市の休場遺跡とともに県下における旧石器時代の先鞭をつけた。

その後、寺谷遺跡、広野北遺跡など長期かつ規模の大きい発掘調査が昭和50年代から始められ、礫群や石器ブロック、配石遺構などとともに土坑が検出されることとなった。

広野北遺跡[12]（第45～48図）

台地の西端、天竜川を望む標高約49mに位置し、沖積地までの標高差は約30mある。昭和40年代に遺跡の存在が知られるようになり、昭和57年５月から12月まで調査が実施された。遺跡の面積は13,000㎡で、昭和60年に遺構・遺物が密集して出土した中央部約6,000㎡について報告書が刊行された。その報告によれば、土坑は礫群を伴う層より17基検出され、時期をナイフ形石器文化層に置いている（17号土坑は除外した）。

土坑のプランは隅丸方形か楕円形、断面形はおおむねU字形を呈する。報告書結語715頁には若干の土坑の用途について検討が加えられている。少々長いが引用する。

「発見状況に照らして可能性を絞ってみたい。まず①土坑の分布する位置は遺跡を載せる台地稜線上の高台に当たる。②周囲の遺跡分布には多少があるものの、必ず石器・礫群・配石のいずれかは分布する。③土坑中には石器・礫・炭化物の流入が認められる。④土坑の埋土は周囲からの流れ込みによって形成されている。これらから、一つには土坑の機能した空間が集落を構成する人々の主たる活動空間に接して配されていたことが察せられる。また埋没状況から故意に埋め戻す行為があったことは考えられない。

ここで土坑の一般的形態から先に可能性として考えられる用途を抜き出してみると、常識的には貯蔵穴・墓壙・落とし穴位に限定されるのではあるまいか。」

この後報告者は①から④までの発見状況と照らし合わせ、用途の検討を行っている。このうち墓壙については埋め戻しの行為がないこと、集落内に分布することから可能性を削除している。また落とし穴については分布上の問題と10号土坑にポイントフレイクが一括投棄されている問題にふれている。分布は「動物の習性に対応するものであり先土器時代と縄文時代の動物あるいはその習性に大きな差を考えなければならなくなる」としている。また「臭覚の発達する動物を捉えようとする落とし穴の中に、ポイントフレイクを投棄することも可能性の少ない行為」と、落とし穴説については疑問視している。

消去法から貯蔵穴の可能性を示唆しているが、以下の疑問点も同時に明記している。

① 頻繁な移動生活が考えられている先土器時代人が定着的要素が強い貯蔵穴をもったかという点

② 調理技術とも絡めて食料貯蔵が一般化するのが縄文時代前期以降とされている点

しかしながら、当時（1.4～1.7万年）の遺跡の植生が冷温帯落葉広葉樹林となり最も可食堅果類（クルミ等）の豊富な林相に対応し、礫群に伴って出土した炭化物の同定結果とも合致することから、貯蔵穴の用途を積極的に評価している。

土坑が17基まとまって検出された点や、様々な観点から用途に言及した点で、広野北遺跡は県下における旧石器時代の土坑研究の始まりといってよいだろう。

表８　広野北遺跡土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	最大深(cm)
１号	96	84	95
２号	140	57	103
４号	118	103	104
５号	110	102	62
６号	120	95	97
７号	103	95	80
８号	111	107	100
９号	99	74	100
１０号	90	76	75
１１号	77	60	86
１２号	114	90	86
１４号	128	95	109
１５号	102	90	105
１６号	106	100	100
１８号	78	68	85
２０号	150	135	100
２１号	80	80	45

寺谷遺跡[13]（第49・50図）

磐田原台地の西麓に位置し、標高92ｍを測る。一帯の現状は茶畑であり、改植により昭和52～54年にかけて２～５次発掘調査を磐田市教育委員会が実施した。

遺跡は北・中央・南の３地点に分かれ、総面積は7,000㎡強と推定されるが、そのうち約2,000㎡の面積をもつ中央部に遺構・遺物が集中し、礫群・配石がそれぞれ11ヶ所確認されている。

土坑は東側の浅い谷に向かう地域から３基検出された。プランは円形・楕円形を呈し、直径１ｍを越えることで共通するが深さは一定しない。１号土坑が最も規模が大きく、直径145㎝、深さ125㎝を測る。３号土坑のプランは楕円形で直径100㎝、深さ80㎝を測る。２号土坑は断面が浅い皿状を呈するため、陥穴状土坑ではないという判断をした。報告書では「貯蔵穴であるという積極的証拠は求め得なかった」

と報告されており「今後の類例の出現を待ってさらに検討していきたい」と結ばれている。

匂坂中下4遺跡[14]（第51・52図）

平成５年に茶畑改植が計画され、梵天古墳群の確認とともに、下層の旧石器時代の調査を実施することとなり、３次に分けて平成６年に発掘調査が行われた。遺跡は一面に茶畑が広がる磐田原台地西端、標高約70m付近に立地し、天竜川平野との標高差約50mを計測する。土坑は２基検出された。

７号土坑のプランは円形で、直径１m、深さ1.5mを測る。底面は平坦に造られ、段状に落ち込む。底面は直径0.7mを測る。上部に灰黄色の皿状の落ち込みが見られるが、別遺構として捉えるのではなく、上部壁が崩れたのちに堆積したものと考えられる。

８号土坑は確認面のプランで東西1.5m、南北1.2mのやや楕円形を呈する。深さは1.1mを測る。壁は垂直に落ち込み、底面は平坦に造られる。

２基とも確認面は磐田原台地でいうＶｂ層上面で確認しているが、覆土が黄褐色土のためⅡ～Ⅳ層調査の段階では認識されなかった。黒色土系の堆積を覆土中に認めなかったことから、旧石器時代の遺構と判断したことが報告書に述べられている。なお報告書は事実記載のみで、その用途等についての検討は加えられていない。

表９　寺谷遺跡土坑計測表

土坑番号	直径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
1号	145	123
3号	100	80

表10　匂坂中下４遺跡土坑計測表

土坑番号	長径(ｃｍ)	短径(ｃｍ)	最大深(ｃｍ)
7号	100	100	150
8号	150	120	110

高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡[15]（第53～55図）

遺跡は磐田原台地の西端から、台地内部に100～200m入った所、標高52～55m付近にある。東名高速道路の磐田原パーキングエリアの移設に伴って、平成６年～８年に当研究所が調査した。

土坑はⅢ遺跡で７基、Ⅳ遺跡で３基検出している。検出面は、ＡＴを検出した暗色帯よりも上である。平面形は円形、楕円形、方形とある。円形の土坑は、平均の直径約70cm、平均の深さ約70cmである。楕円形の土坑は、平均の長径約150cm、短径約80cm、平均の深さ約40cmである。方形の土坑は、長辺の平均長約100cm、短辺の平均長約70cm、平均の深さは約151cmである。方形の土坑は、明らかに円形、楕円形の土坑よりも深く、深さが200cmに及ぶものもある。円形・楕円形の土坑と方形の土坑とでは機能が違うのかもしれない。

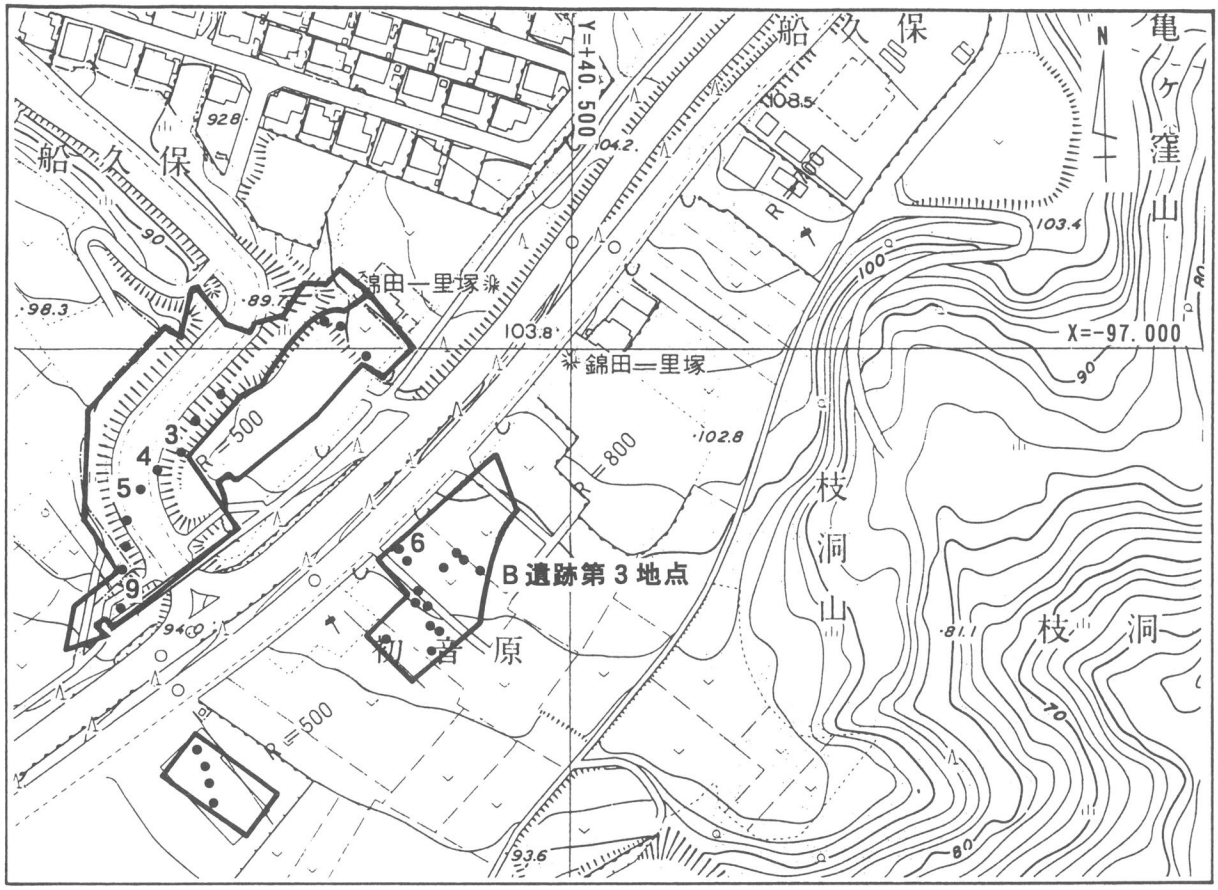
分布は、微高地から谷に向かう傾斜面に分布するものが多く、遺物の分布域から離れ、単独で分布する傾向が強い。例えば、Ⅲ遺跡の土坑４は、遺物の分布域から50m近く離れ、周囲に遺構や遺物がまったく分布しない谷底付近にある。

以上の土坑内からは遺物はほとんど出土しておらず、分布に規則性はない。　（以上、富樫）

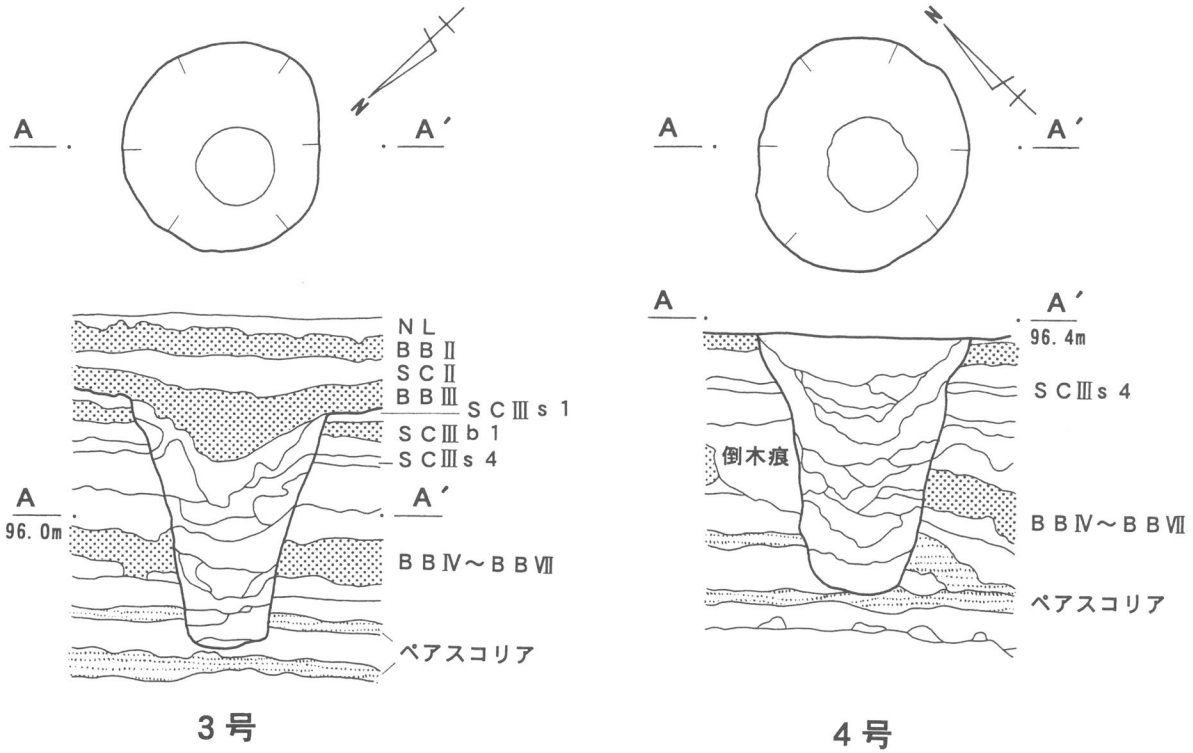
表11　高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡土坑計測表

Ⅲ　遺　跡				Ⅳ　遺　跡			
土坑番号	長径（cm）	短径（cm）	最大深（cm）	土坑番号	長径（cm）	短径（cm）	最大深（cm）
1号	115	81	200	1号	64	-	77
2号	160	72	85	2号	163	128	27
3号	87	81	70	3号	97	77	133
4号	71	-	67				
5号	140	75	20				
6号	160	68	21				
7号	135	125	115				

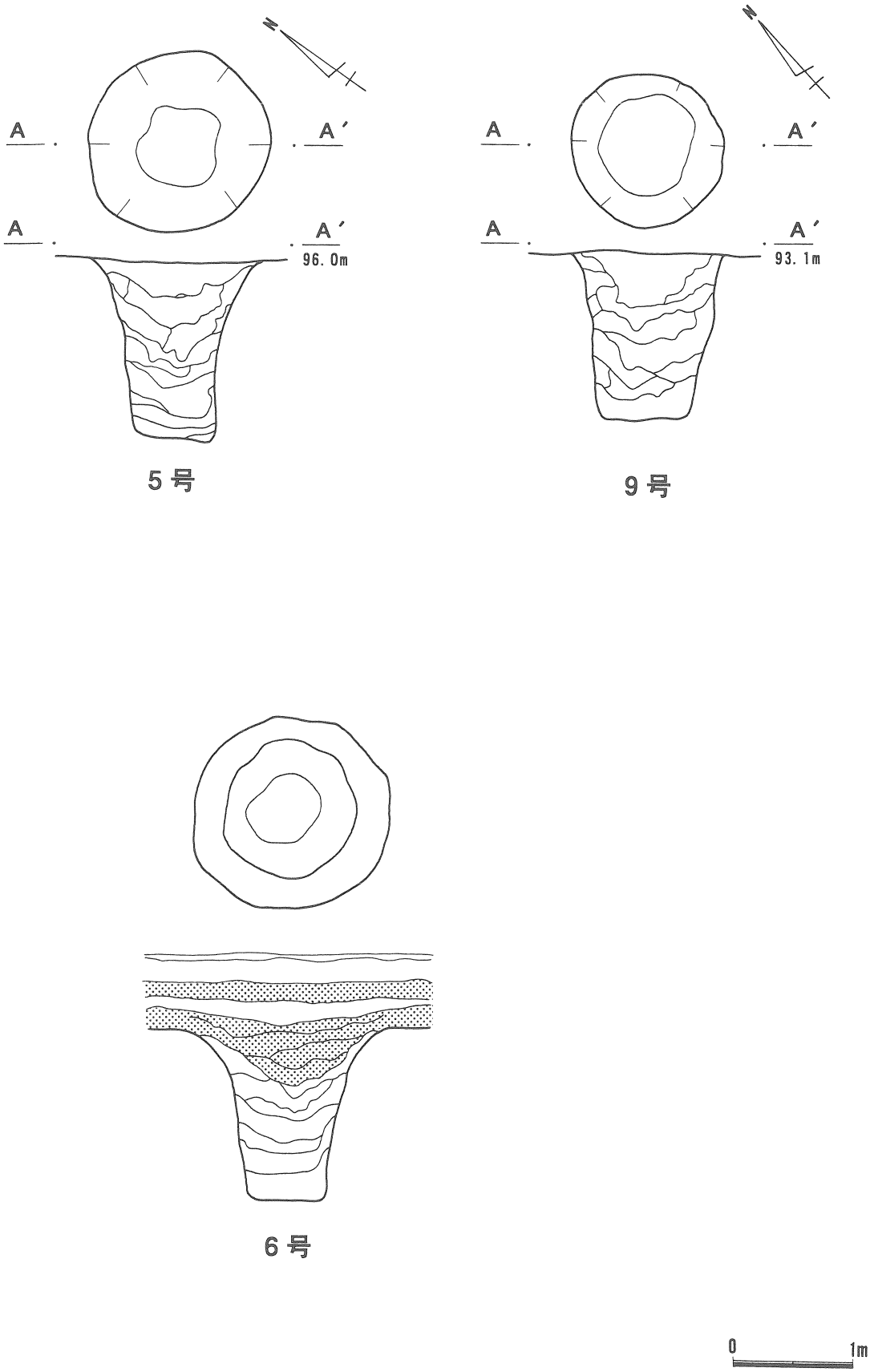
第17図　箱根山麓陥穴状土坑検出遺跡およびＢＢⅢ期の遺跡周辺地形図（1/25,000 三島）



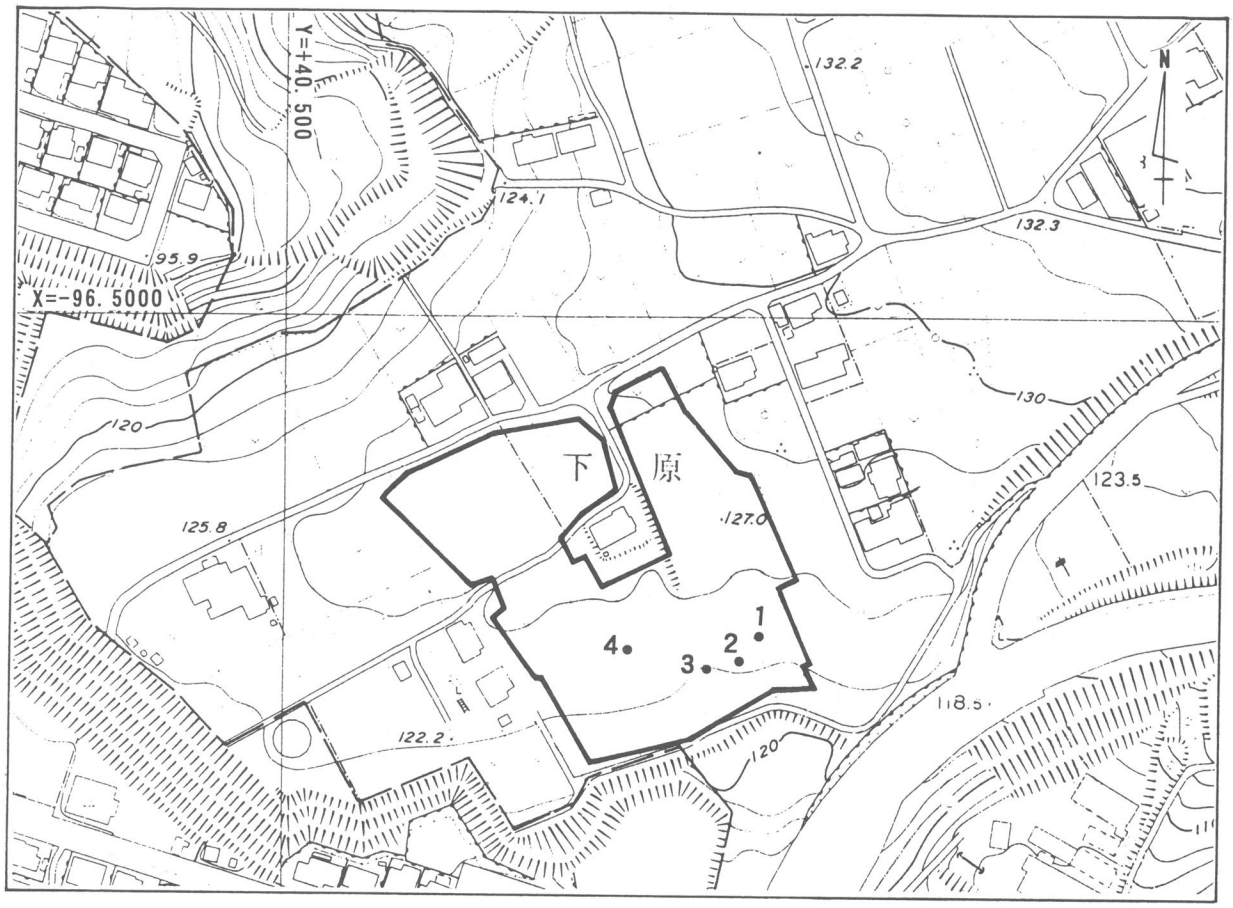
第18図　初音ヶ原遺跡土坑分布図（1/2,500）



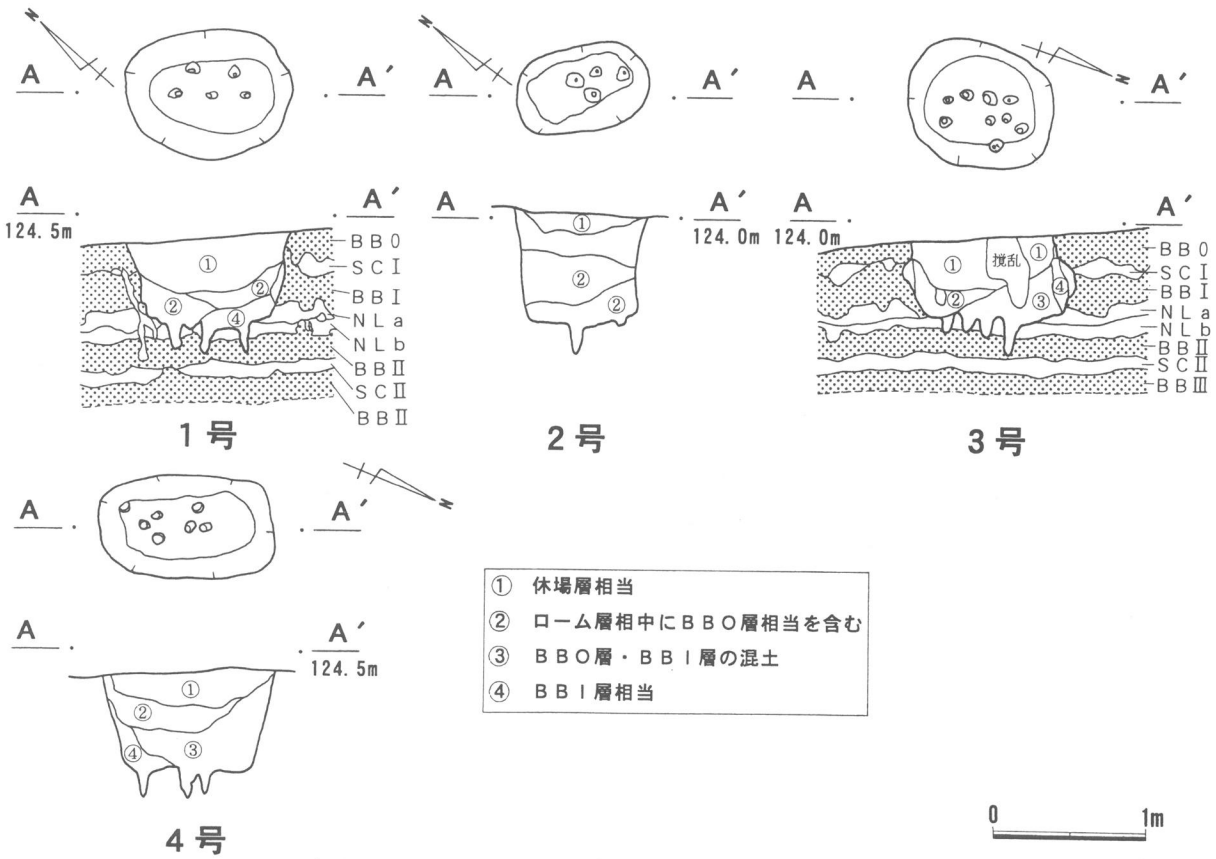
第19図　初音ヶ原遺跡土坑平面・断面図(1)（1/50）



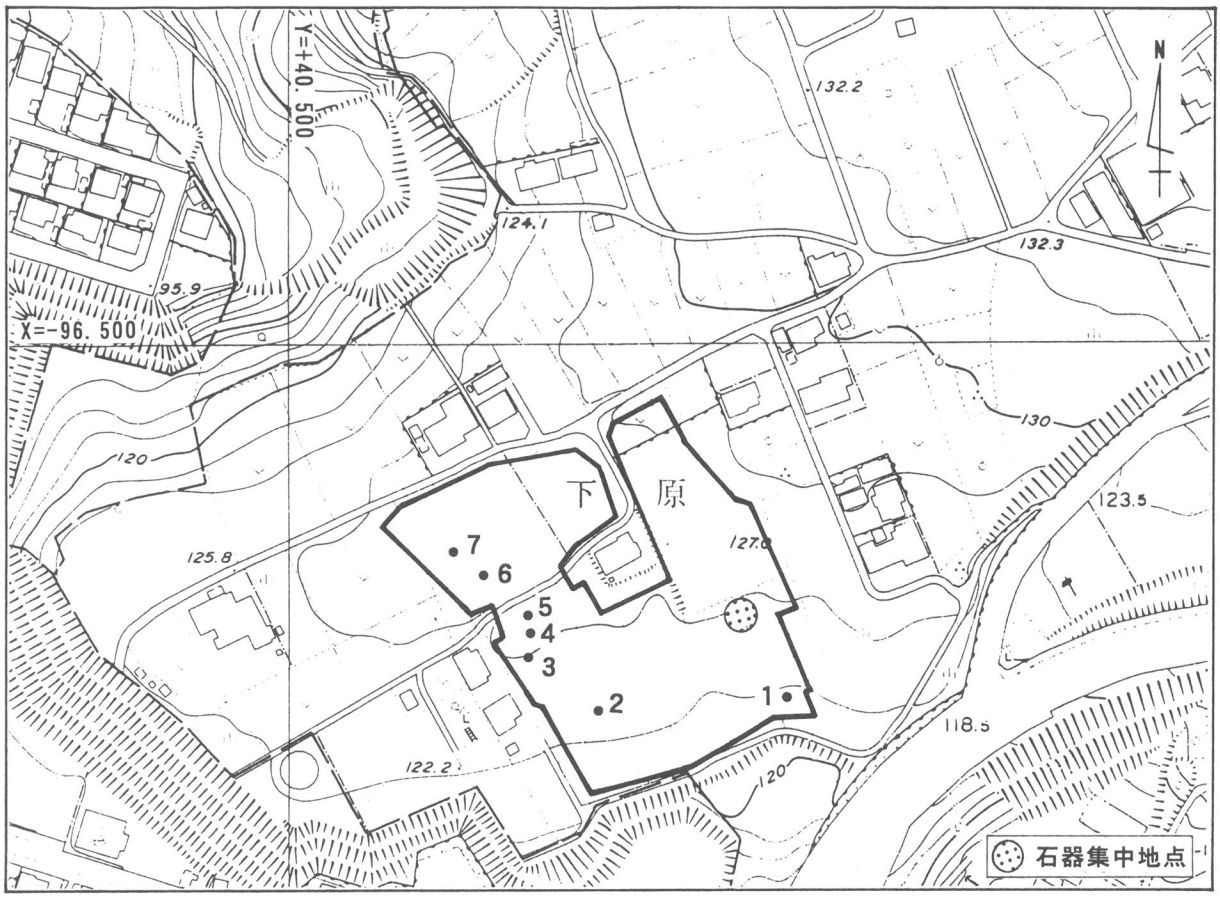
第20図　初音ヶ原遺跡土坑平面・断面図(2)（1/50）



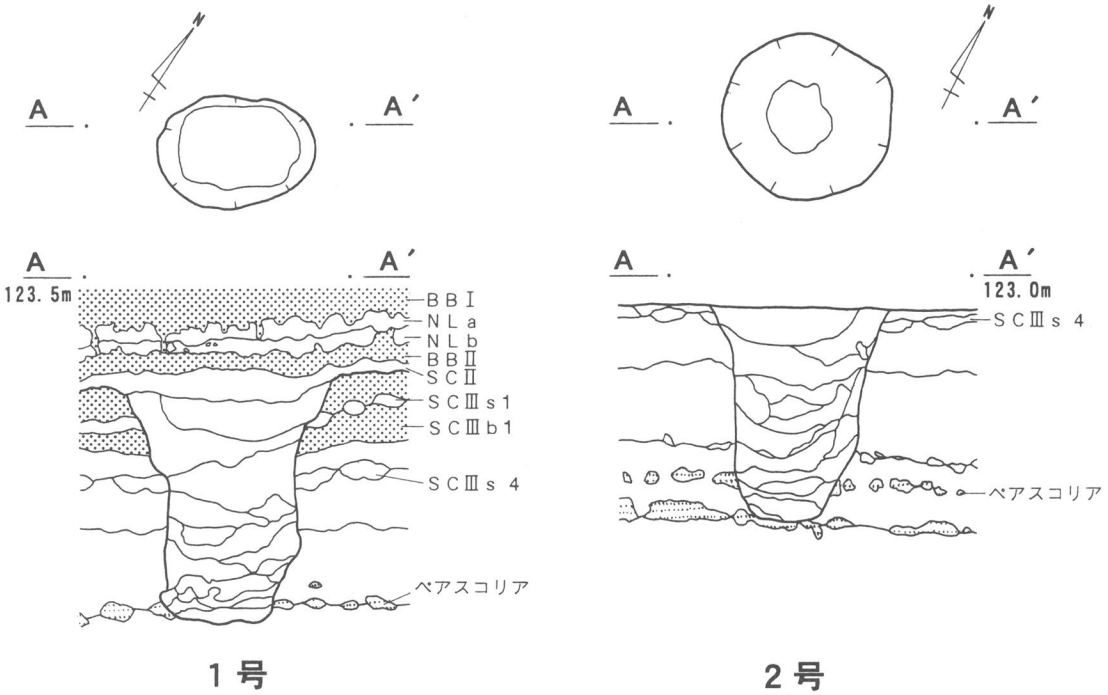
第21図　下原遺跡縄文時代草創期土坑分布図（1/2,500）



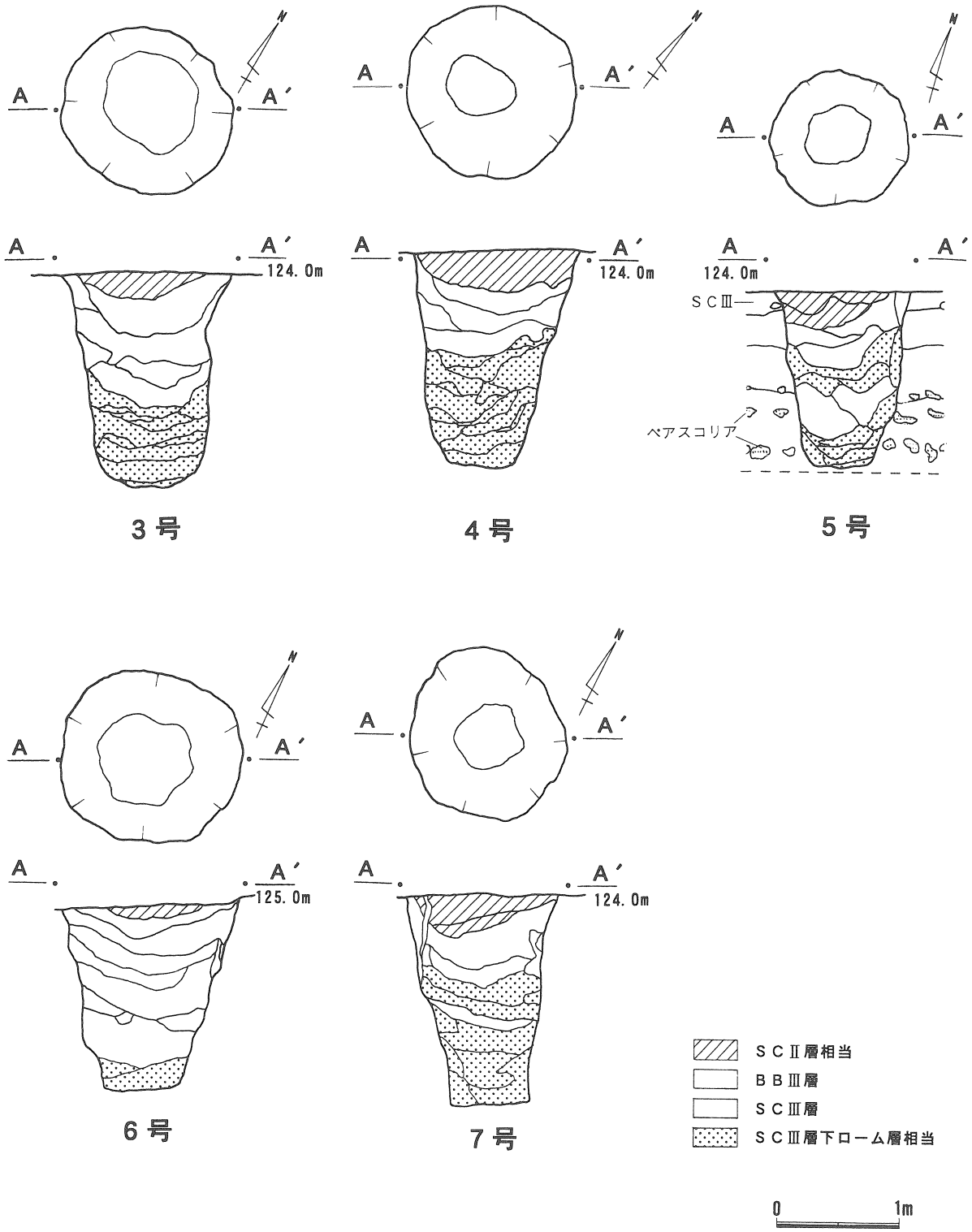
第22図　下原遺跡縄文時代草創期土坑平面・断面図（1/50）



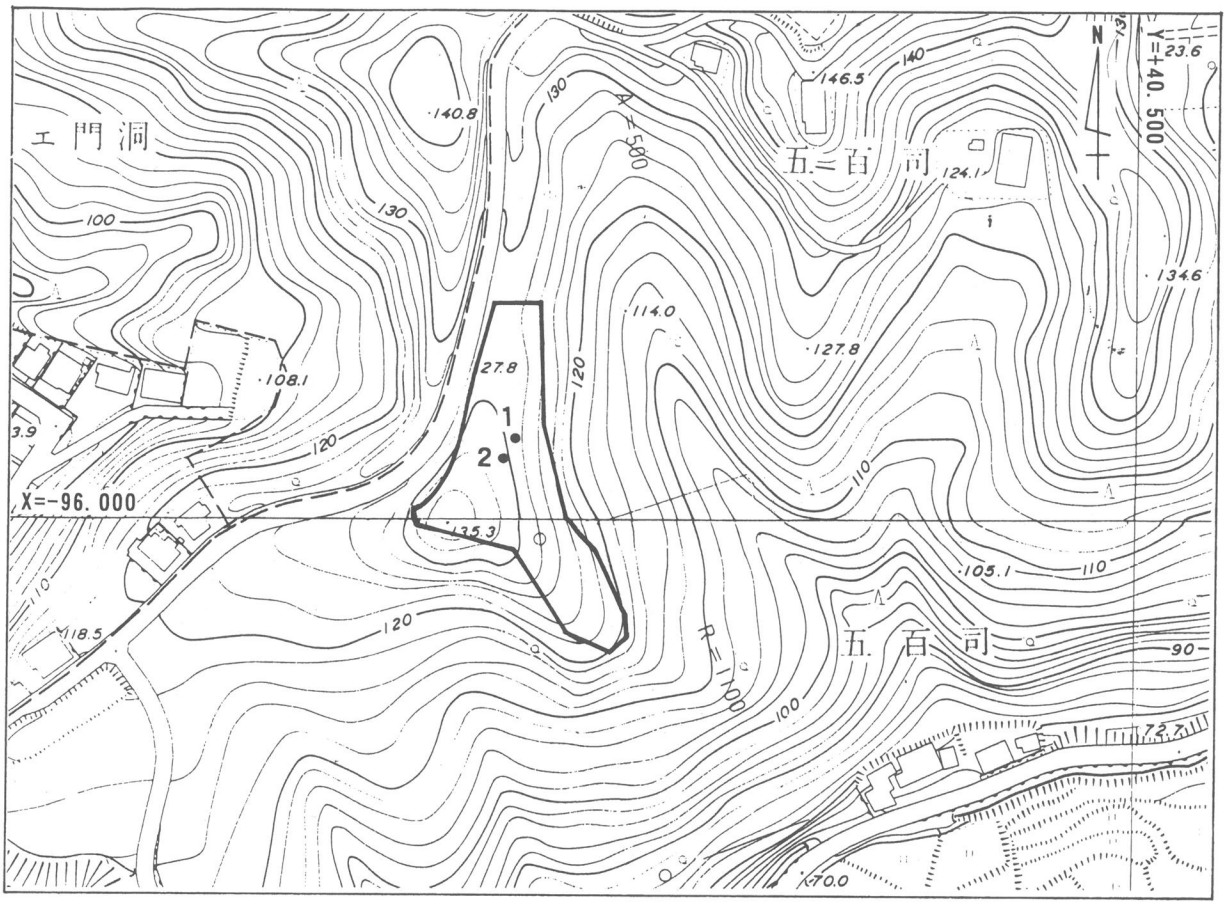
第23図　下原遺跡岩宿（旧石器）時代土坑分布図（1/2,500）



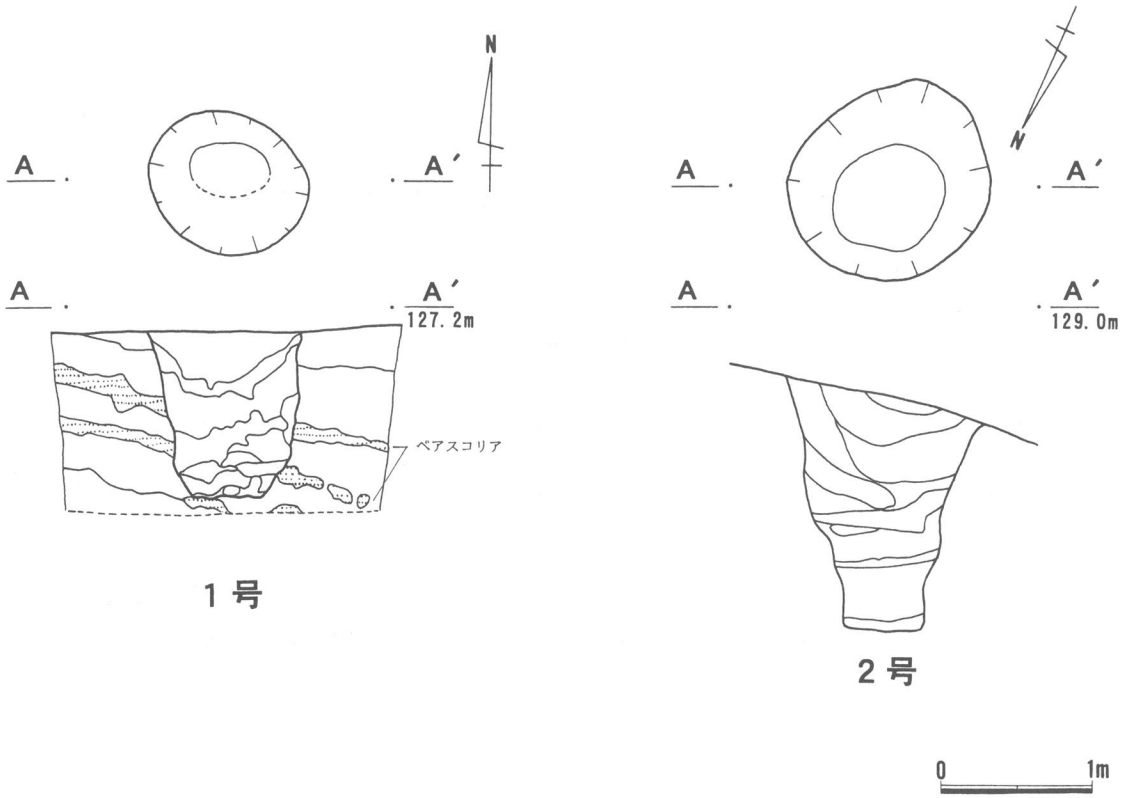
第24図　下原遺跡岩宿（旧石器）時代土坑平面・断面図(1)（1/50）



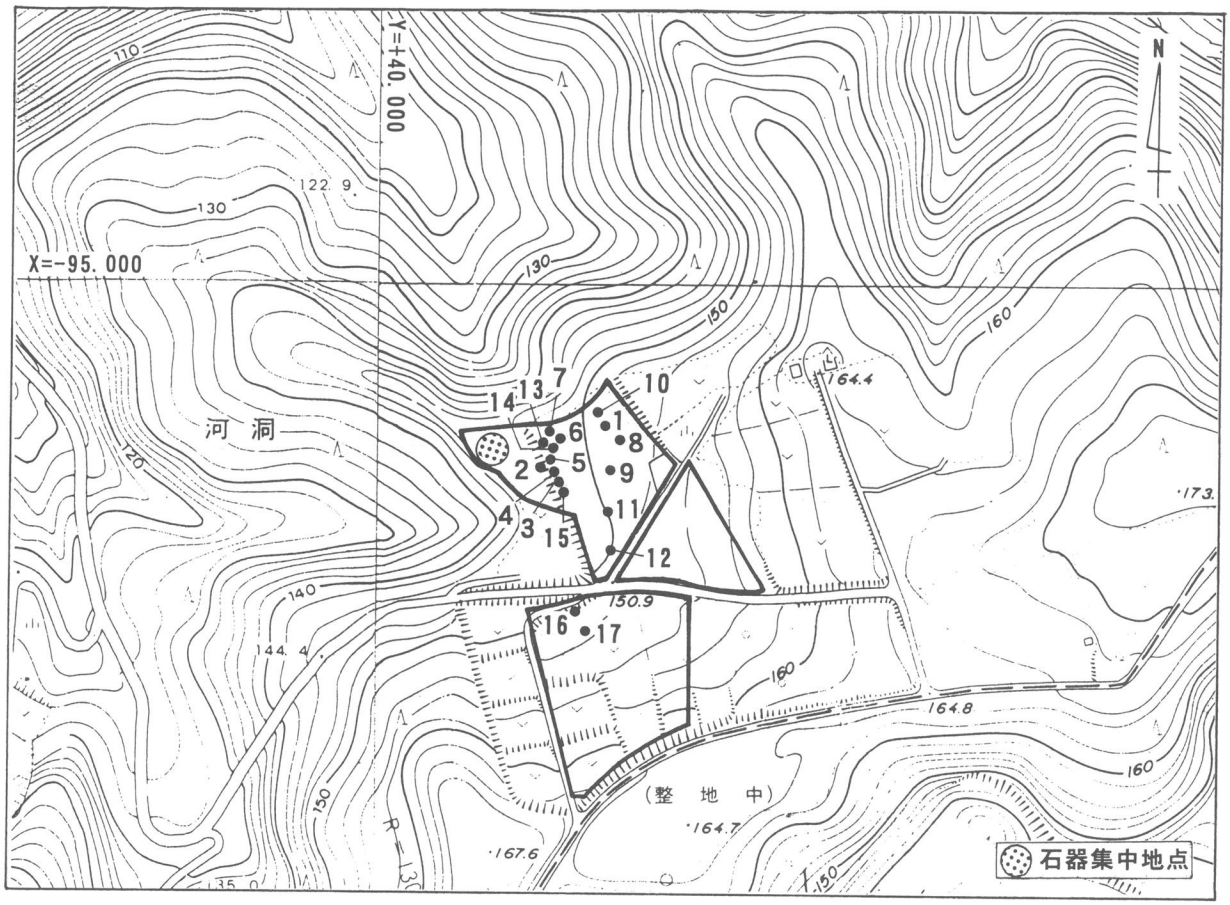
第25図　下原遺跡岩宿（旧石器）時代土坑平面・断面図(2)（1/50）



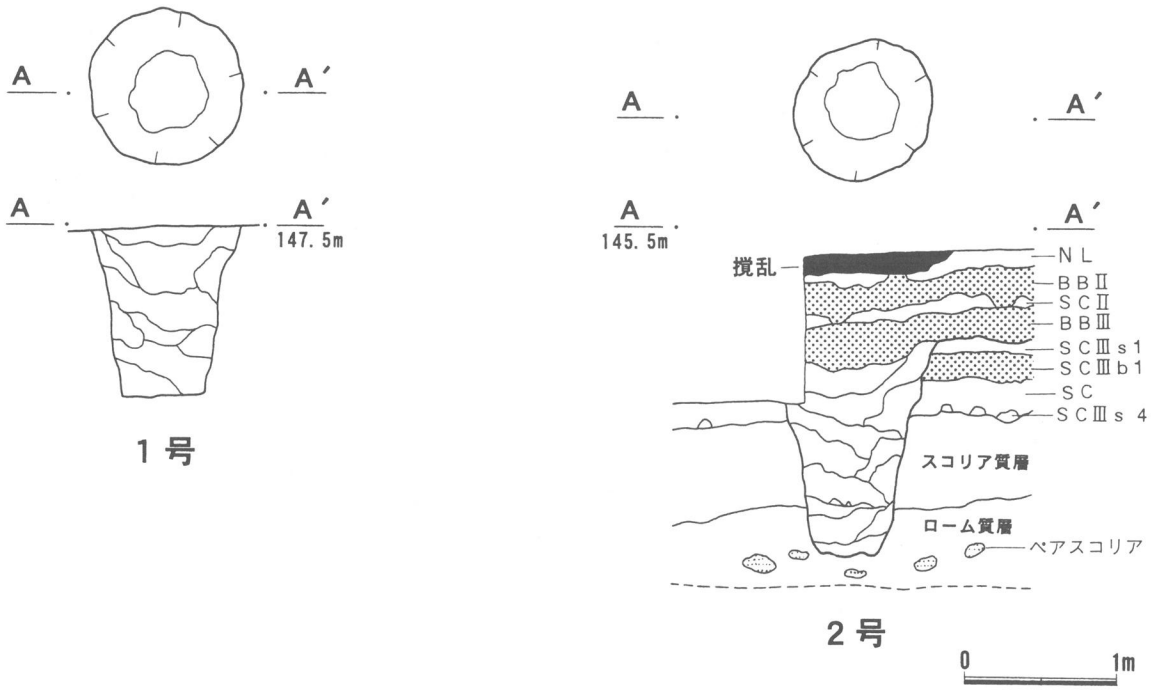
第26図　焼場遺跡Ａ地点土坑分布図（1/2,500）



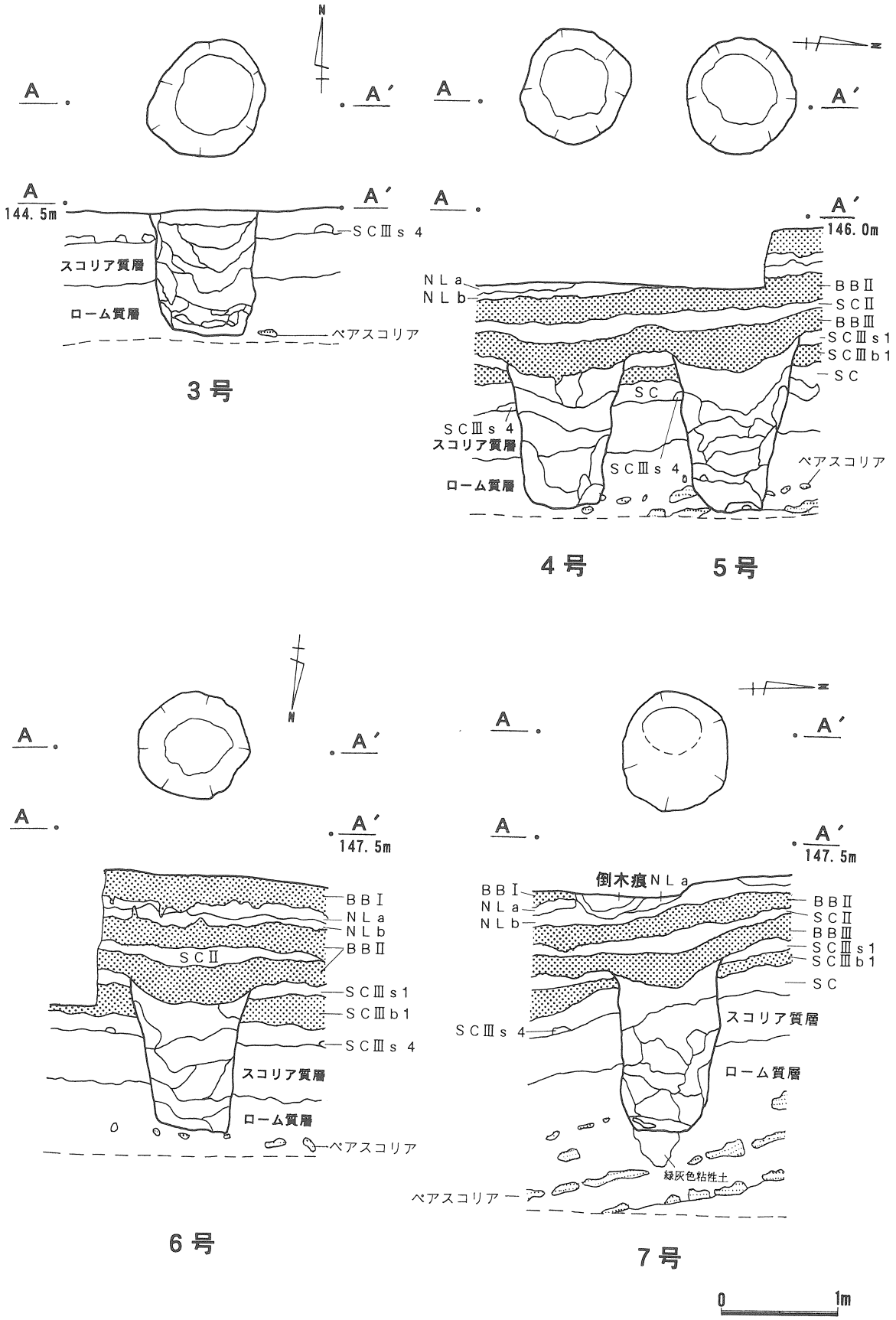
第27図　焼場遺跡Ａ地点土坑平面・断面図（1/50）



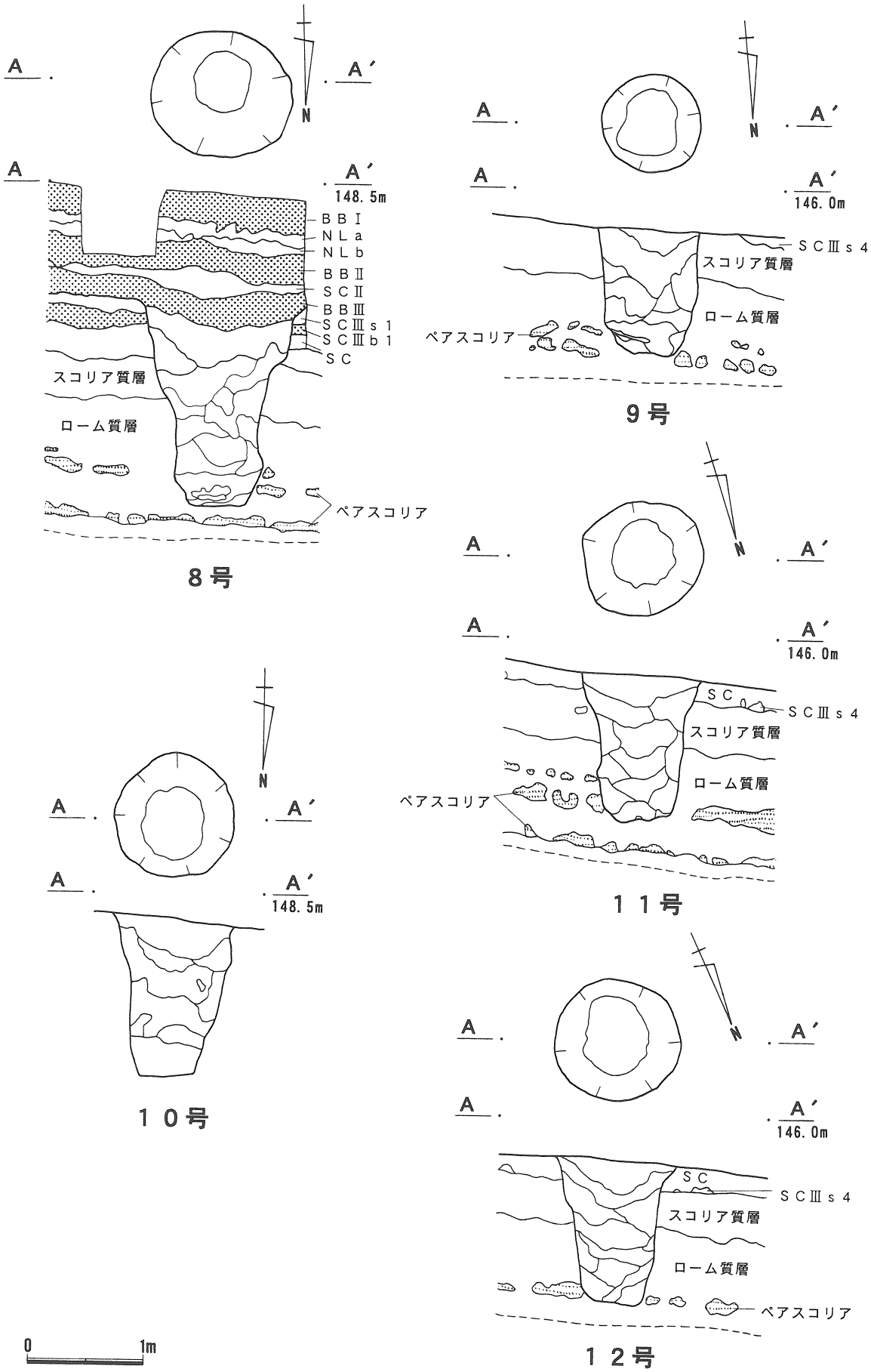
第28図　加茂ノ洞B遺跡土坑分布図（1/2,500）



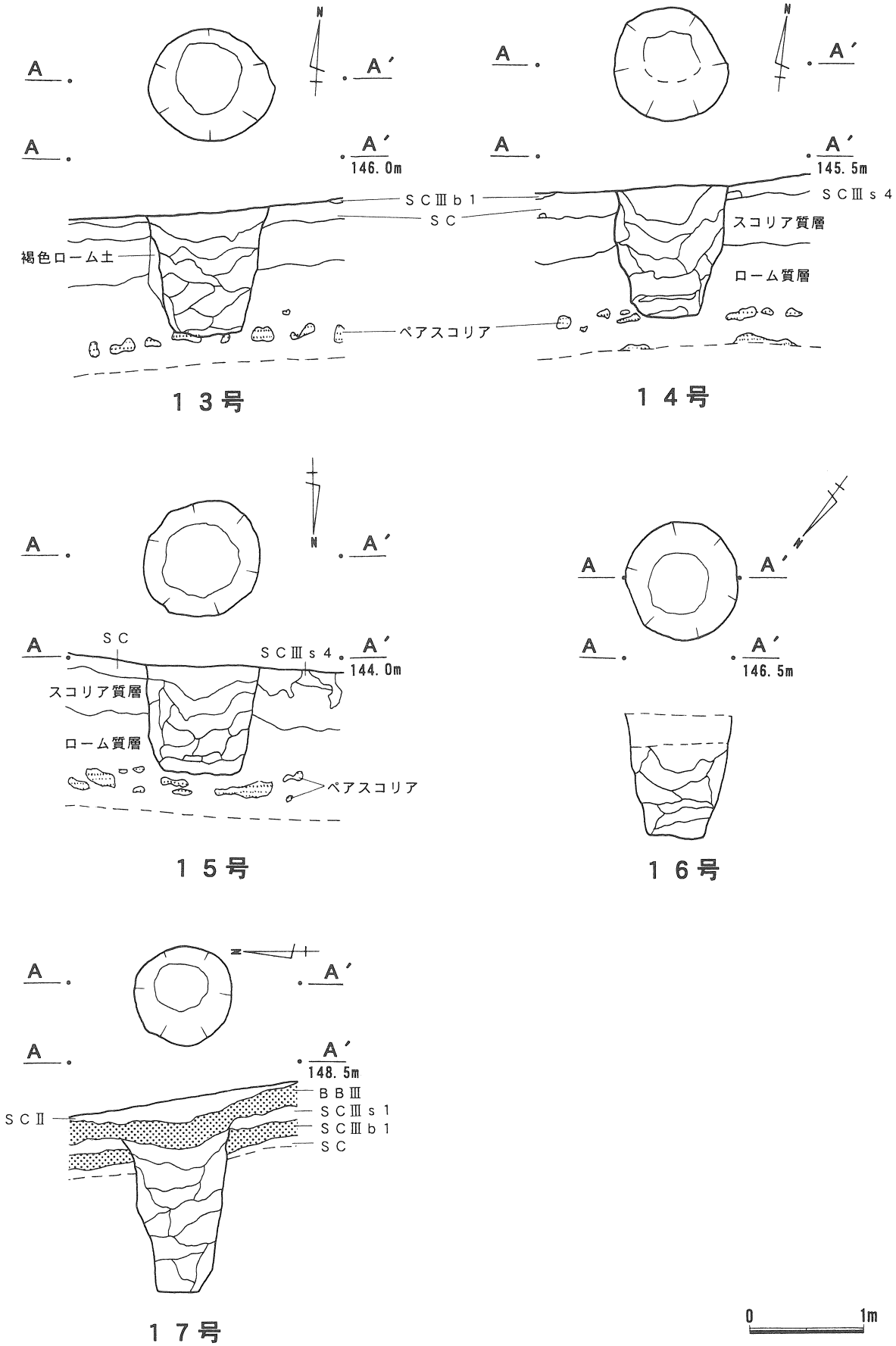
第29図　加茂ノ洞B遺跡土坑平面・断面図(1)（1/50）



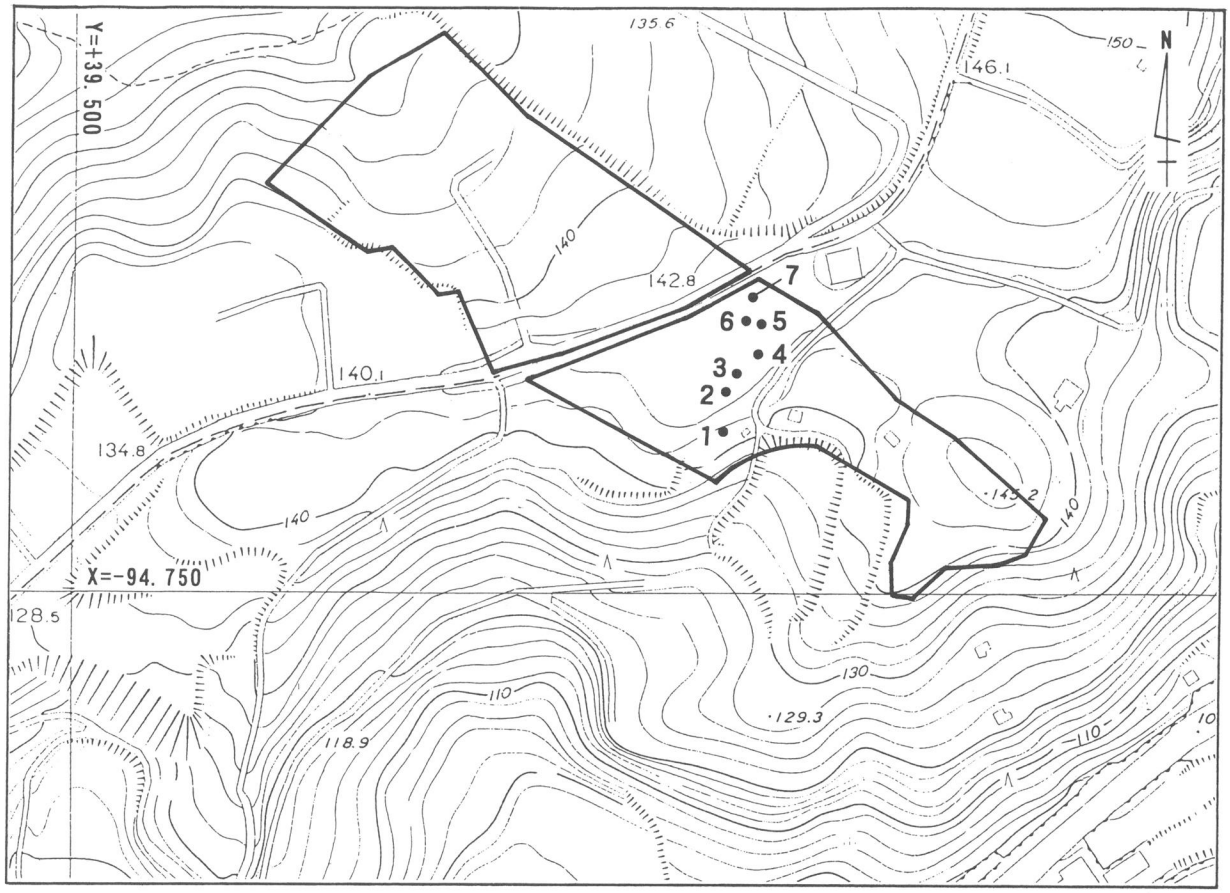
第30図　加茂ノ洞B遺跡土坑平面・断面図(2)（1/50）



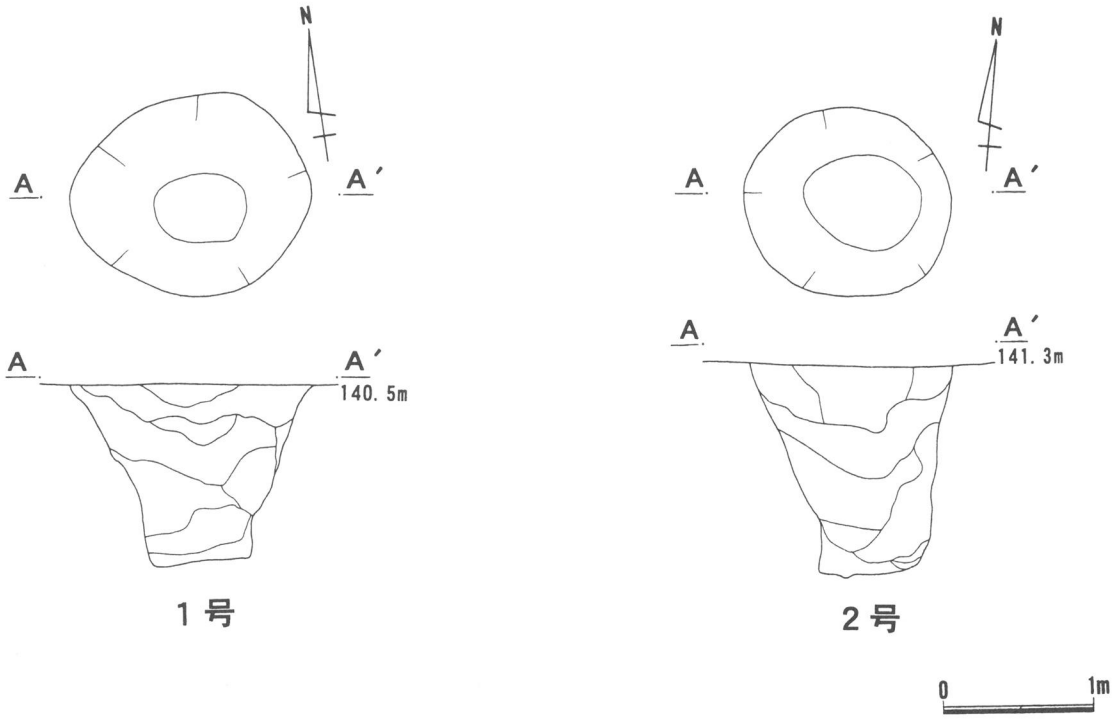
第31図　加茂ノ洞B遺跡土坑平面・断面図(3)（1/50）



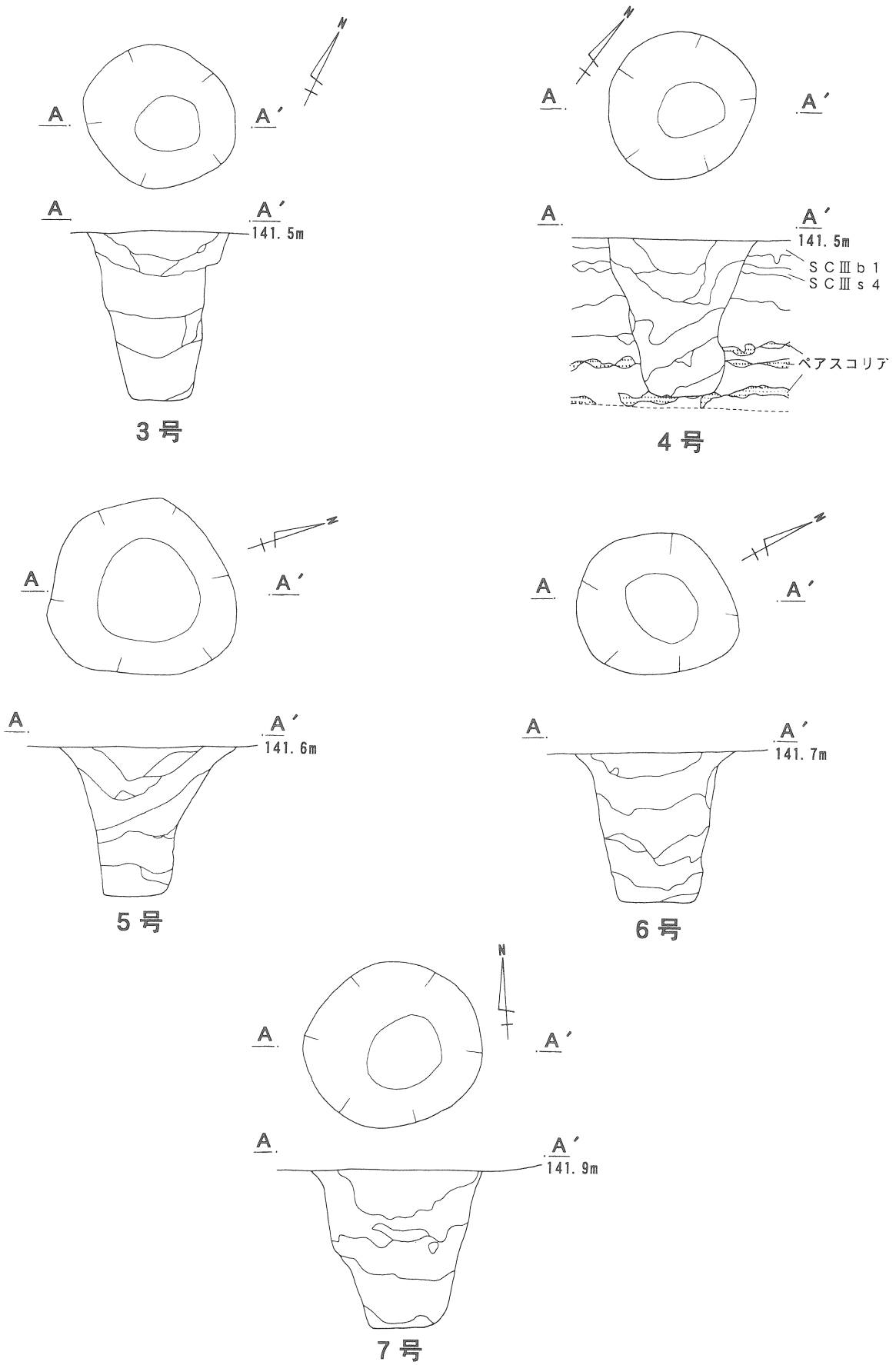
第32図　加茂ノ洞B遺跡土坑平面・断面図(4)（1/50）



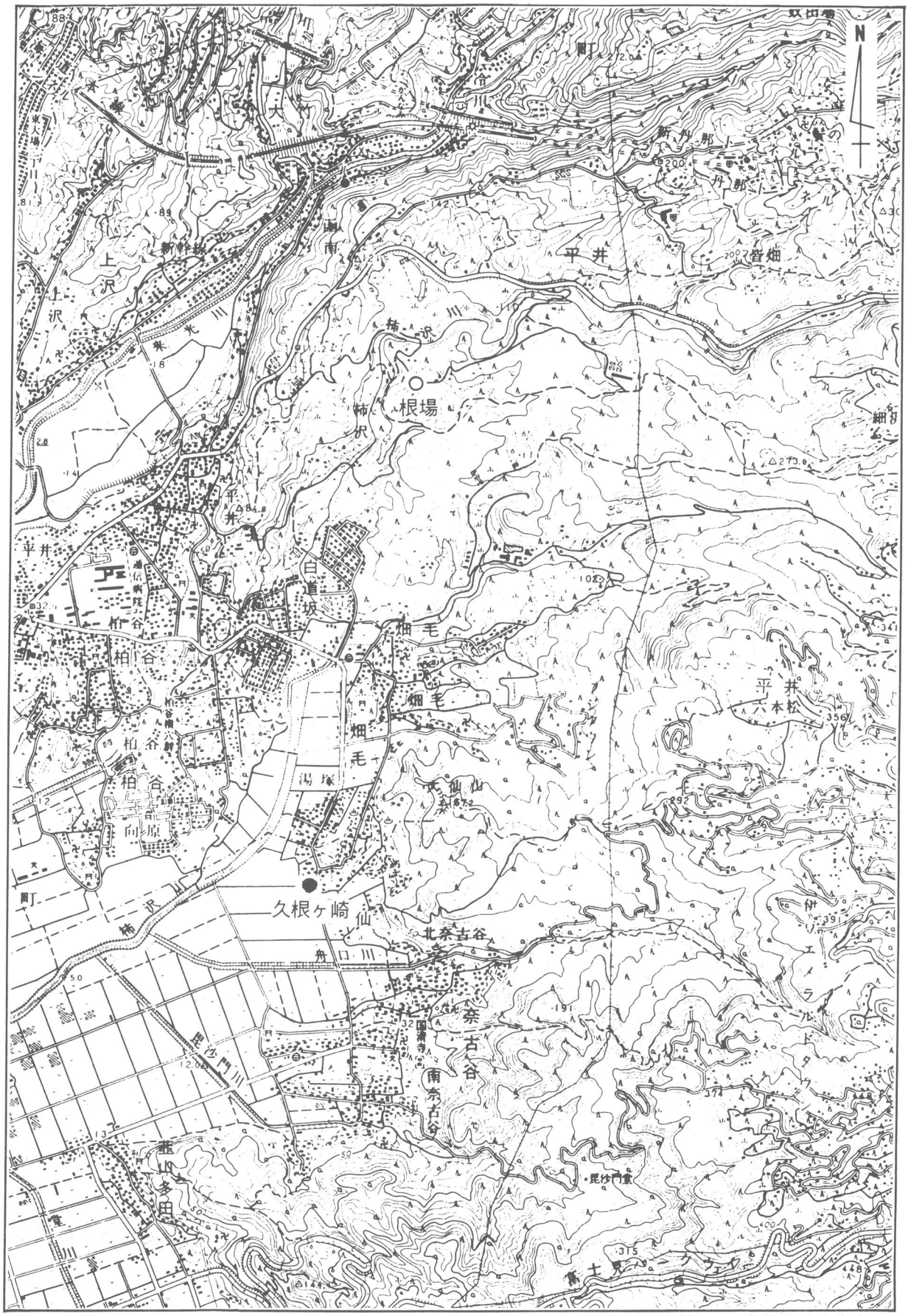
第33図　八田原遺跡土坑分布図（1/2,500）



第34図　八田原遺跡土坑平面・断面図(1)（1/50）

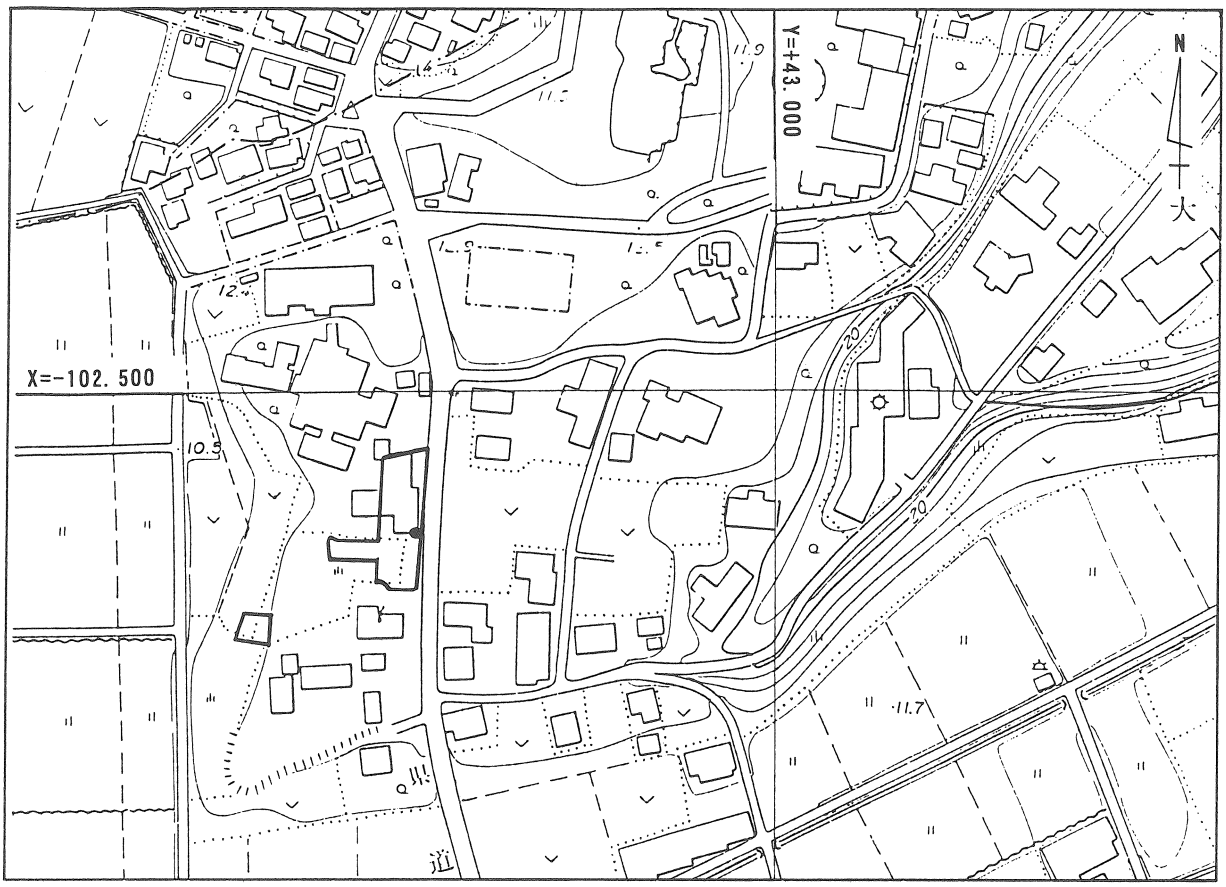


第35図　八田原遺跡土坑平面・断面図(2)（1/50）

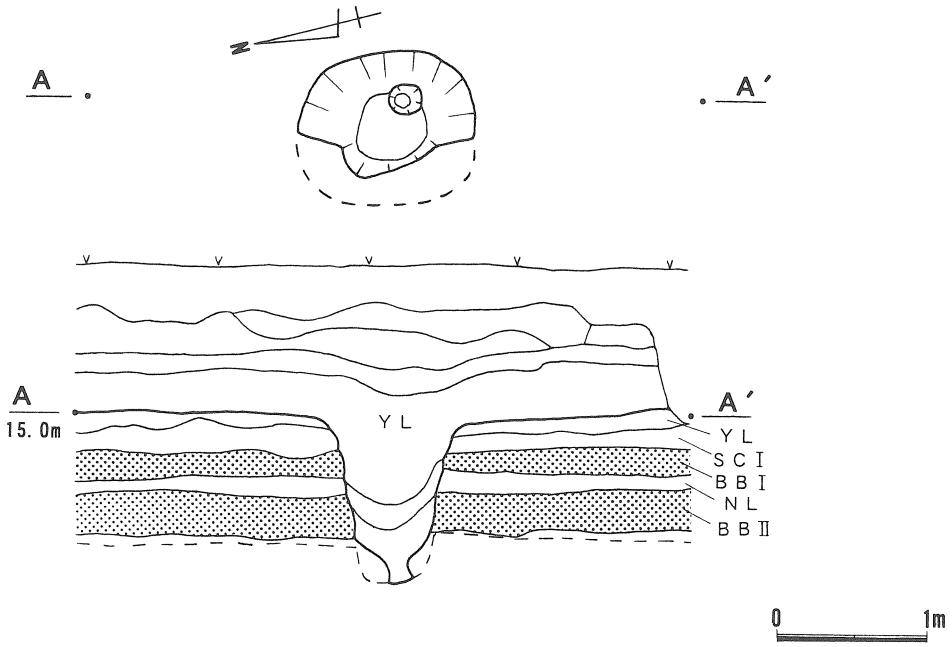


●土坑のみ出土　○石器のみ出土

第36図　箱根山麓陥穴状土坑検出遺跡およびＹＬ期の遺跡周辺地形図（1/25,000 韮山）

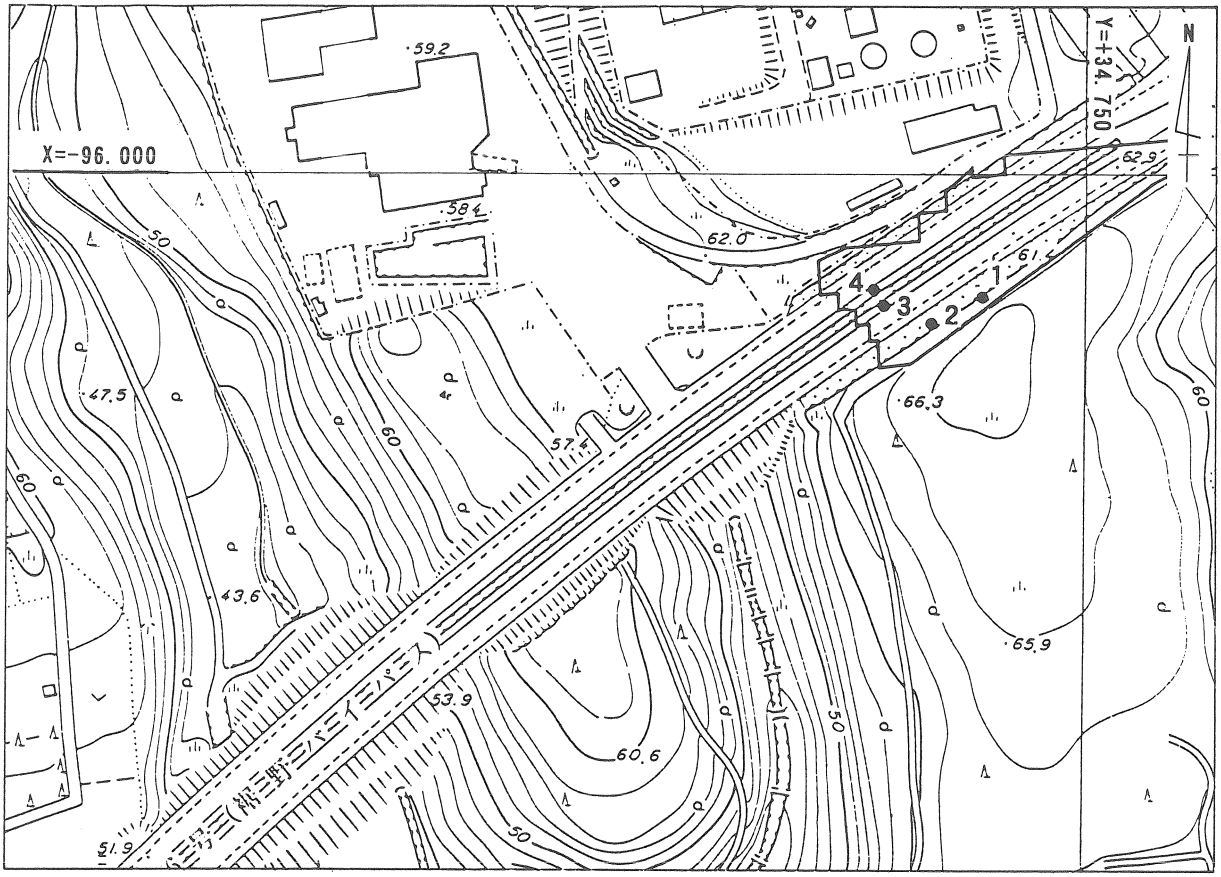


第37図　久根ヶ崎遺跡土坑分布図（1/2,500）

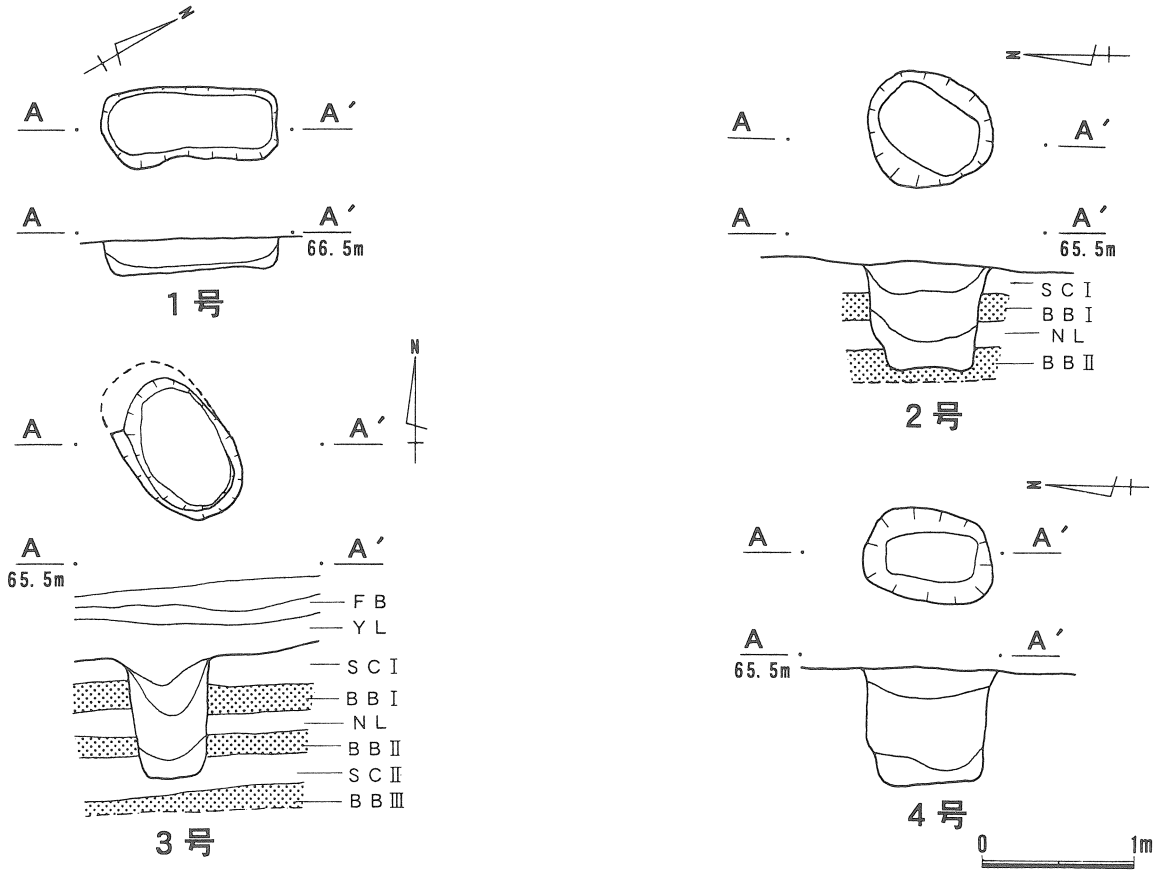


第38図　久根ヶ崎遺跡土坑平面・断面図（1/50）

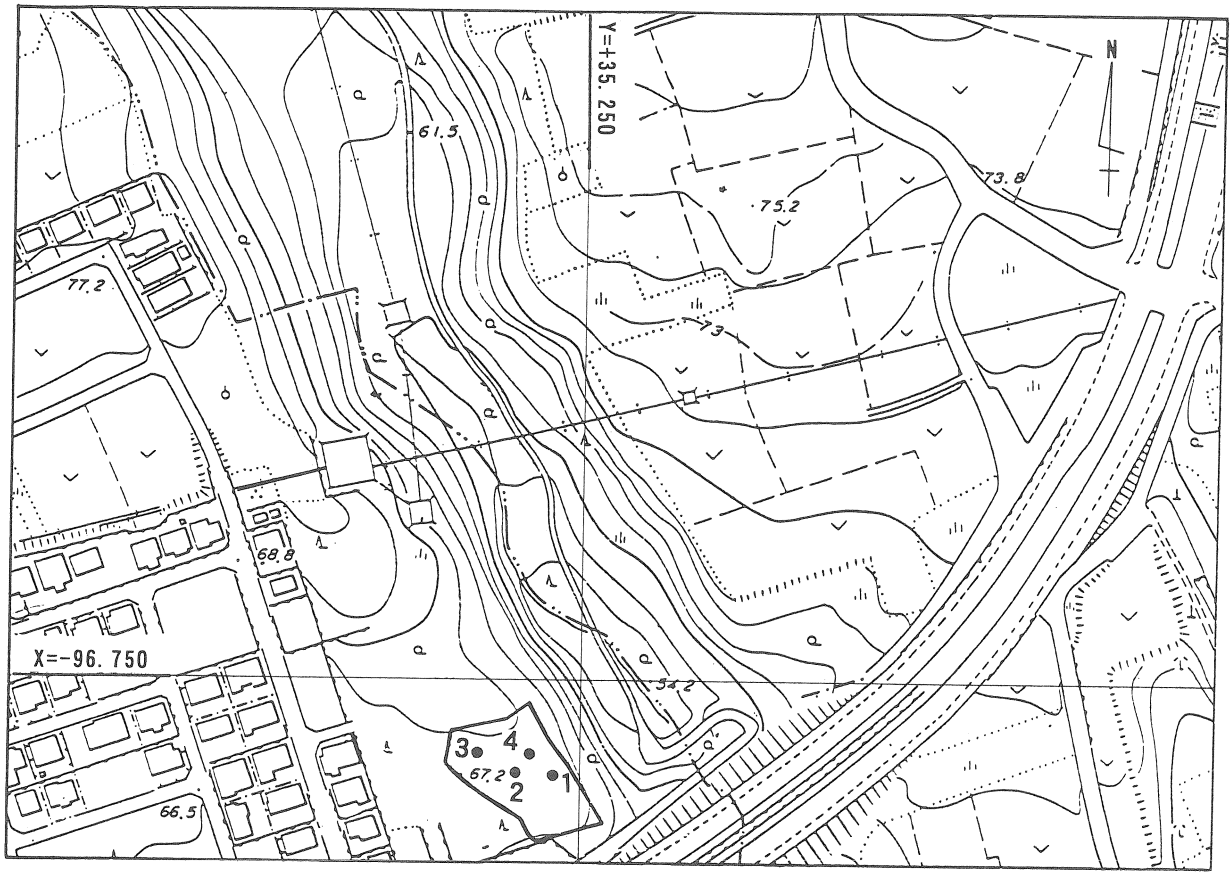
第39図　愛鷹山麓陥穴状土坑検出遺跡およびＹＬ期の遺跡周辺地形図（1/25,000 三島・沼津）



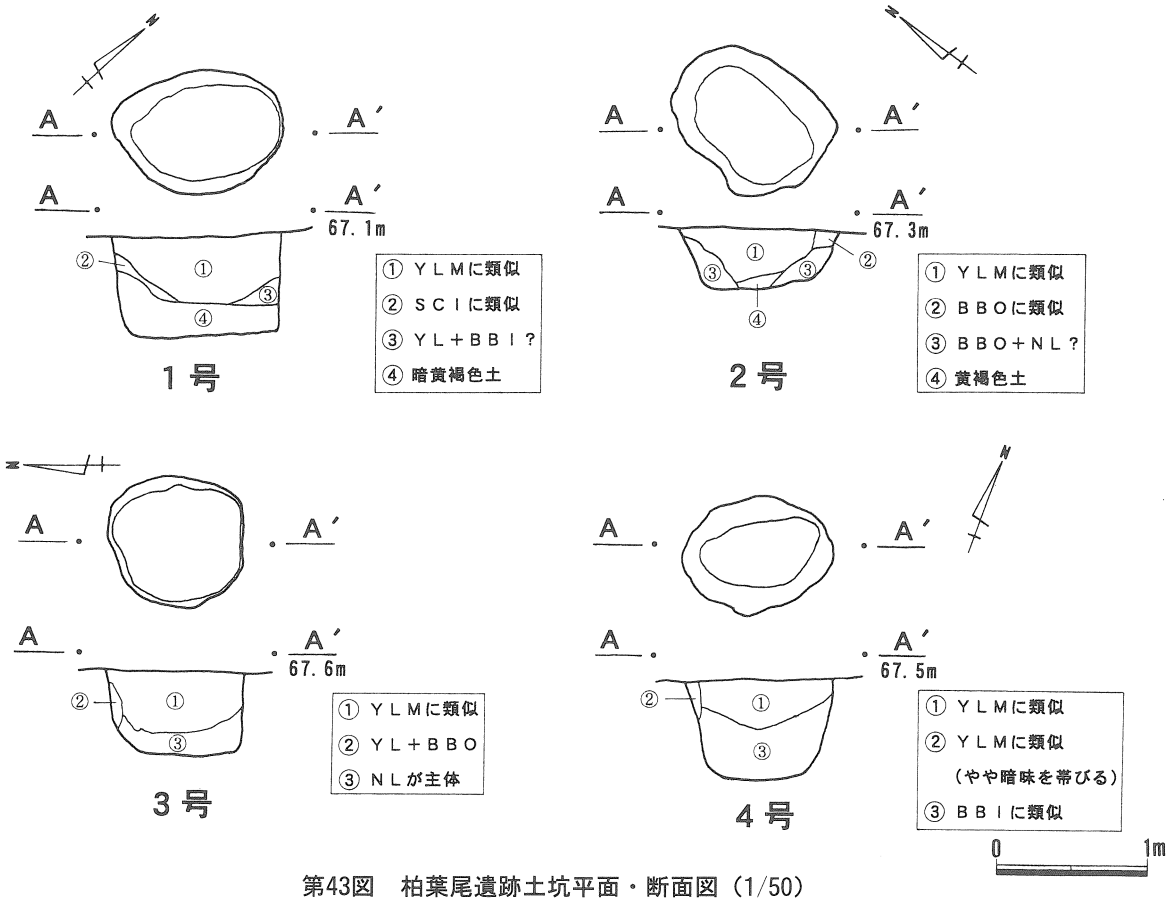
第40図　子ノ神遺跡土坑分布図（1/2,500）



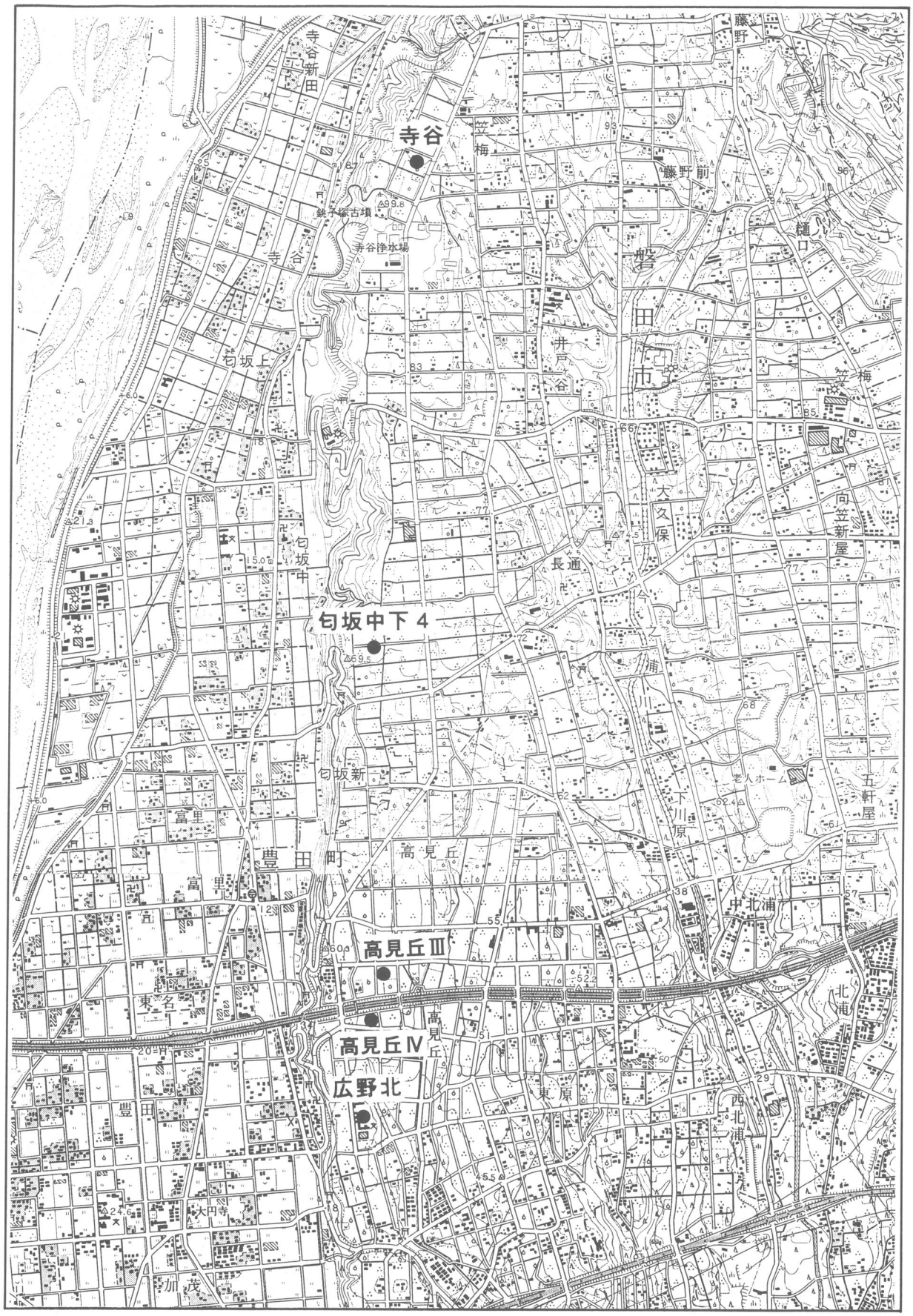
第41図　子ノ神遺跡土坑平面・断面図（1/50）



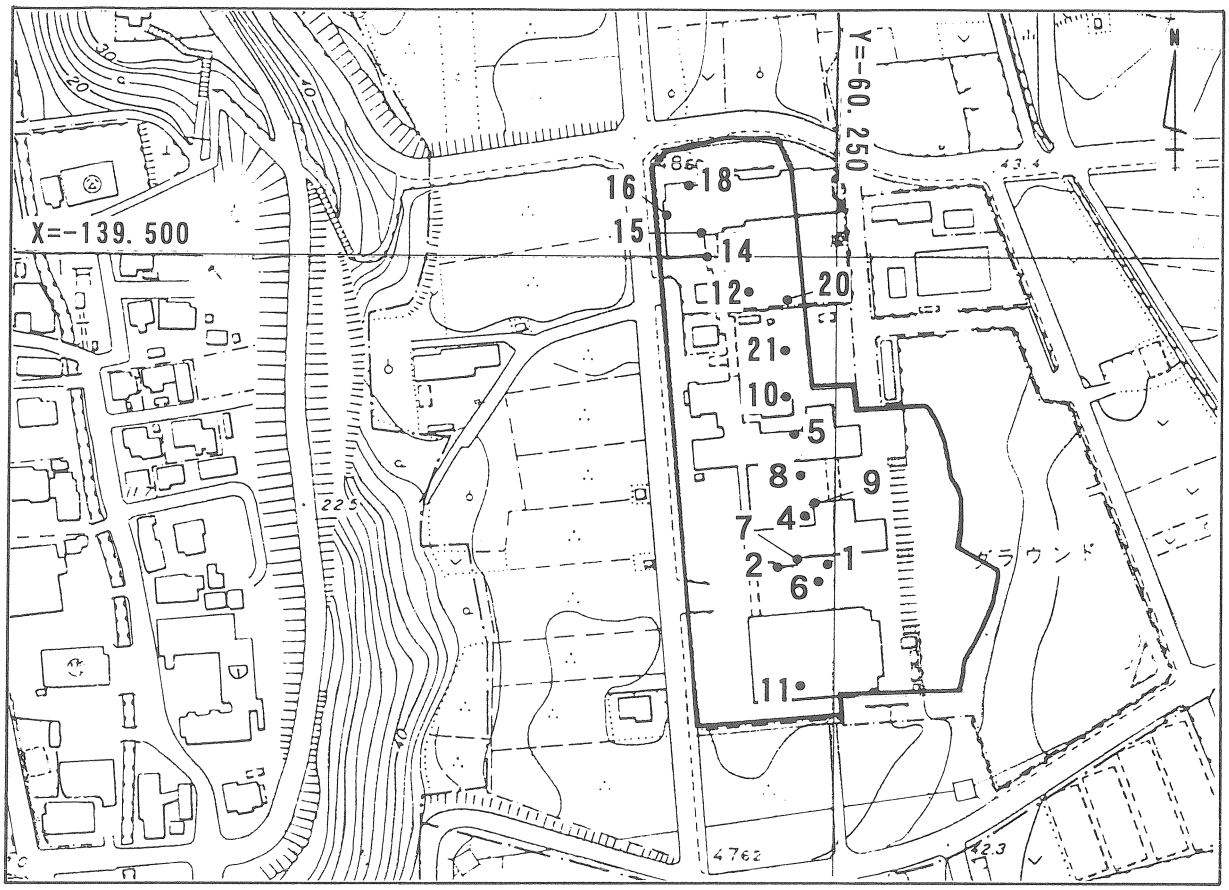
第42図　柏葉尾遺跡土坑分布図（1/2,500）



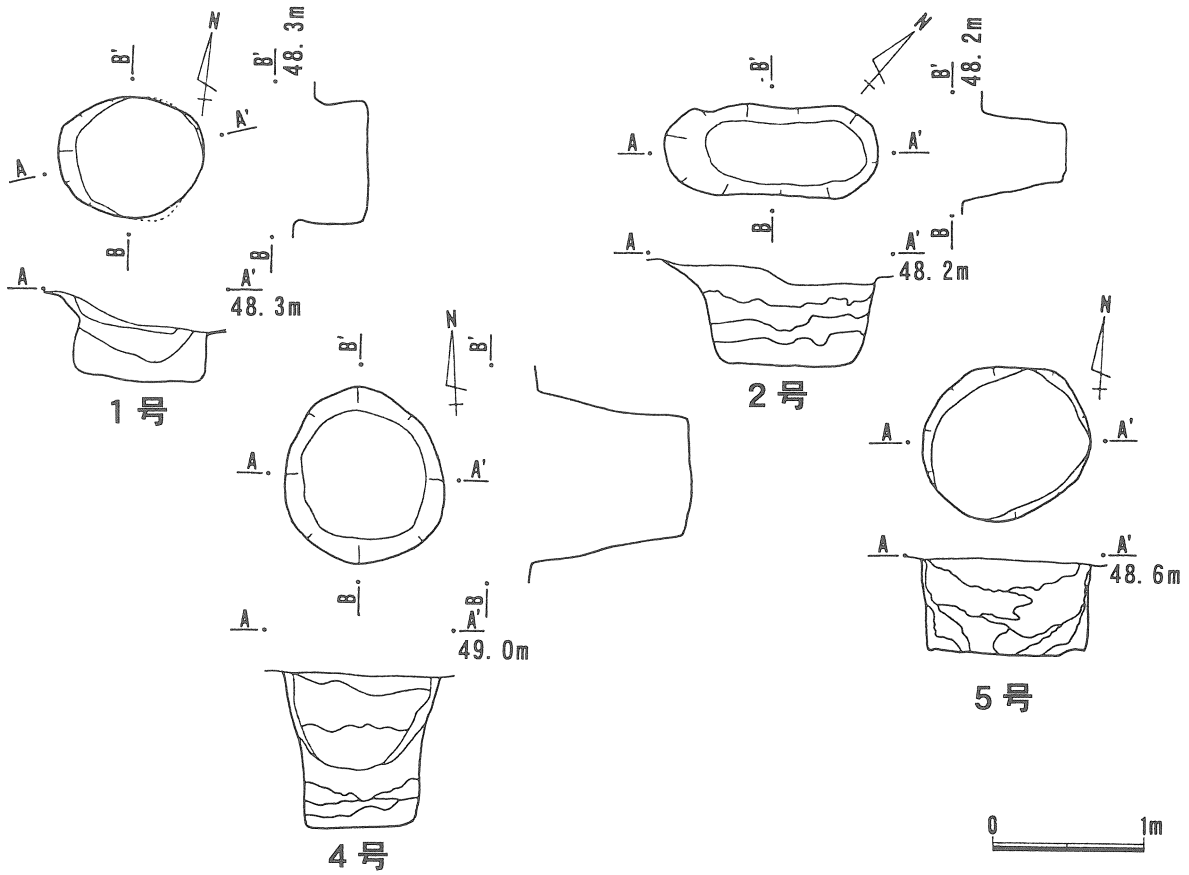
第43図　柏葉尾遺跡土坑平面・断面図（1/50）



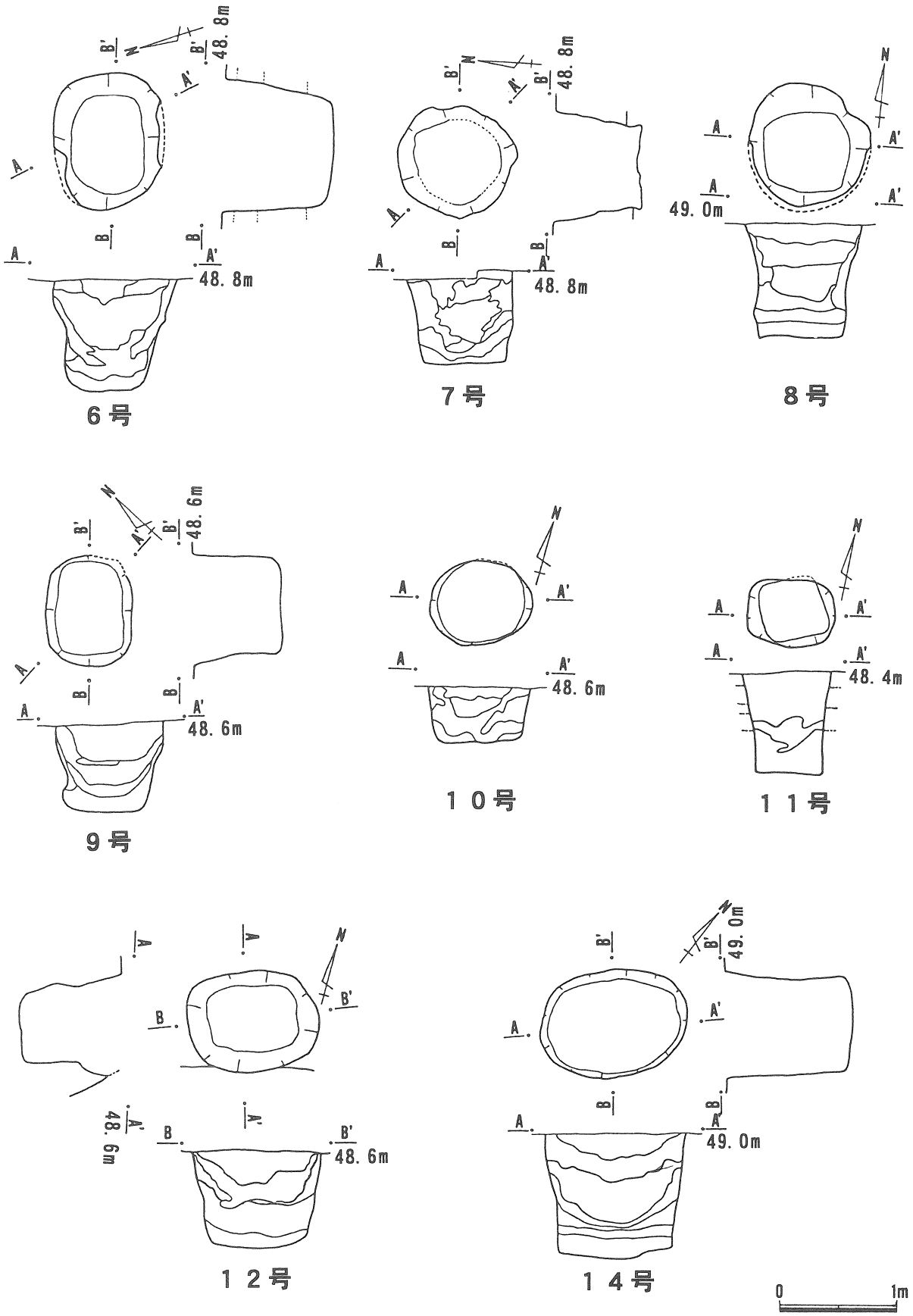
第44図　磐田原台地遺跡位置図（1/25,000 磐田）



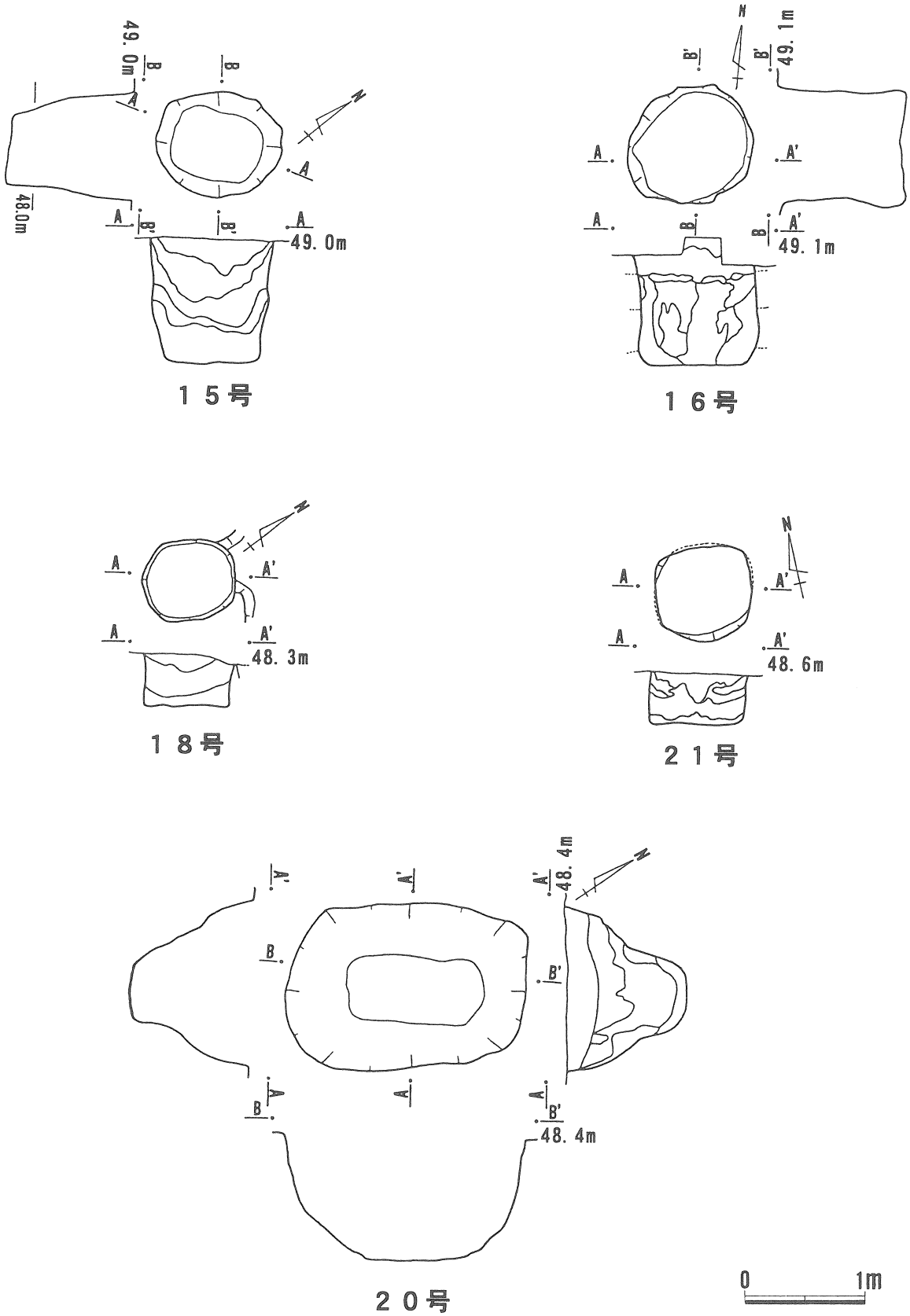
第45図　広野北遺跡土坑分布図（1/2,500）



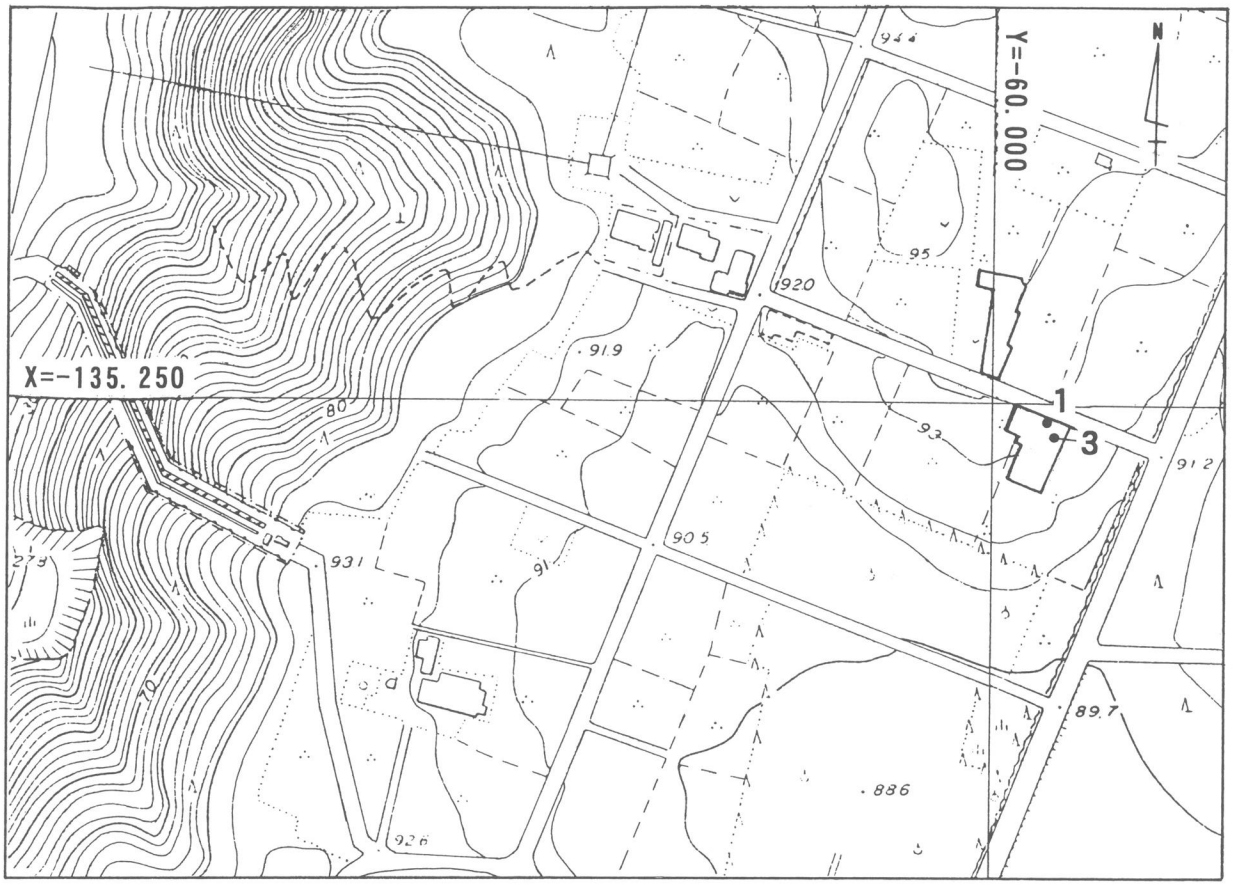
第46図　広野北遺跡土坑平面・断面図(1)（1/50）



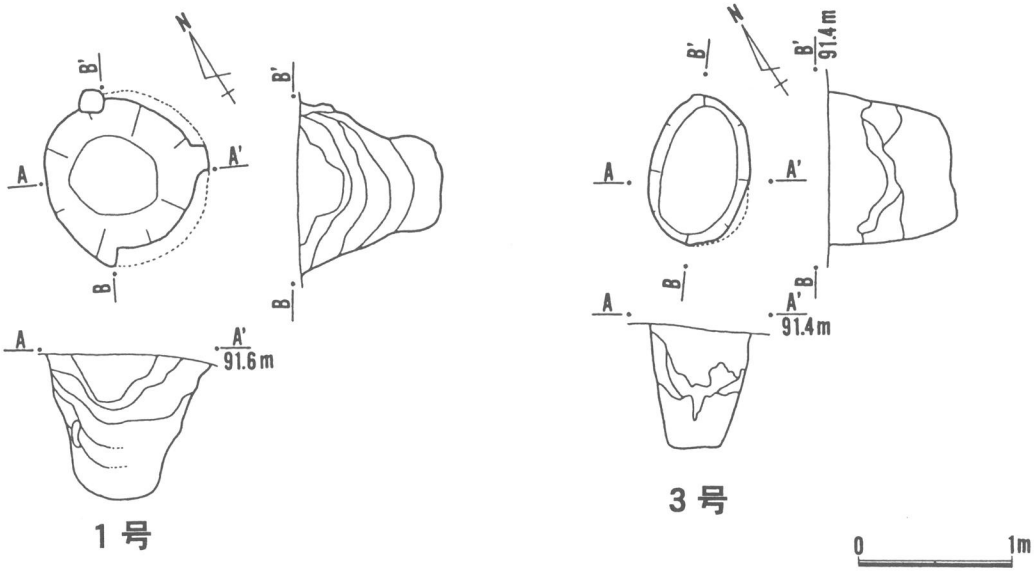
第47図　広野北遺跡土坑平面・断面図(2)（1/50）



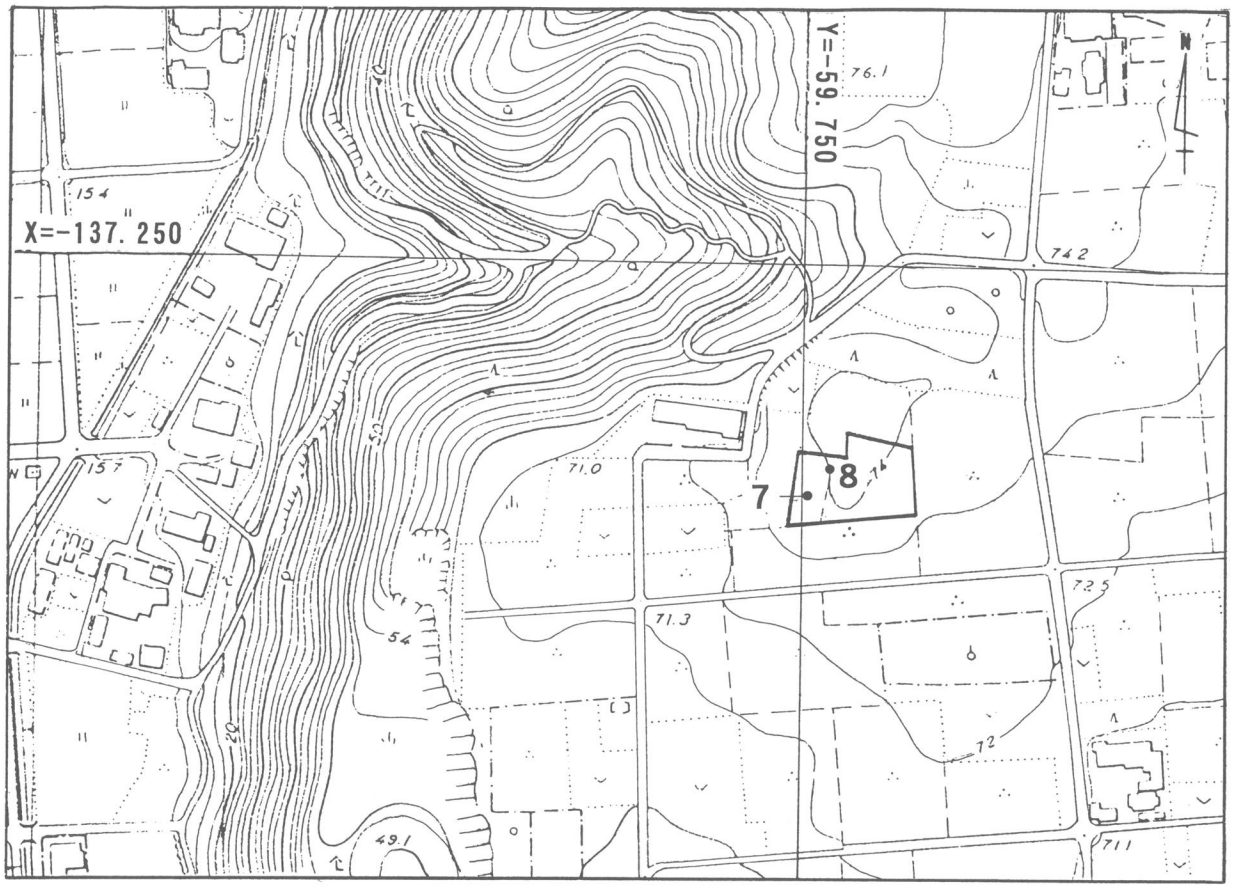
第48図　広野北遺跡土坑平面・断面図(3)（1/50）



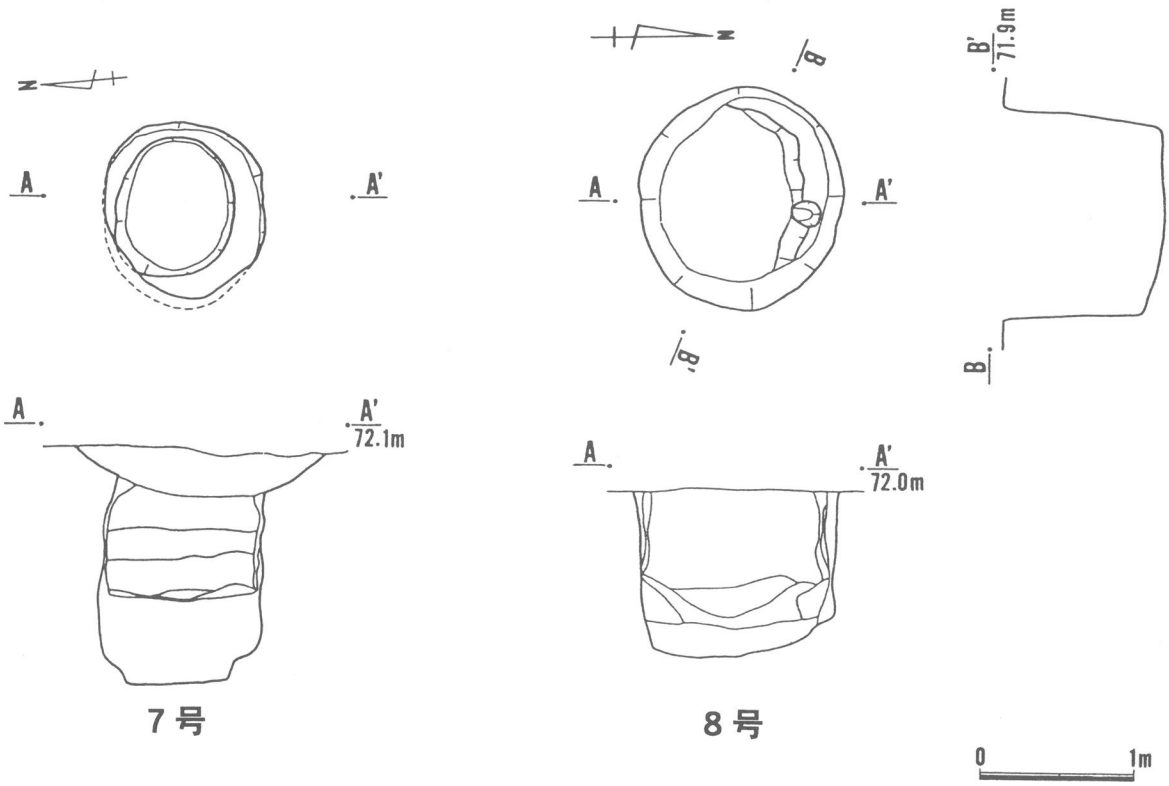
第49図　寺谷遺跡土坑分布図（1/2,500）



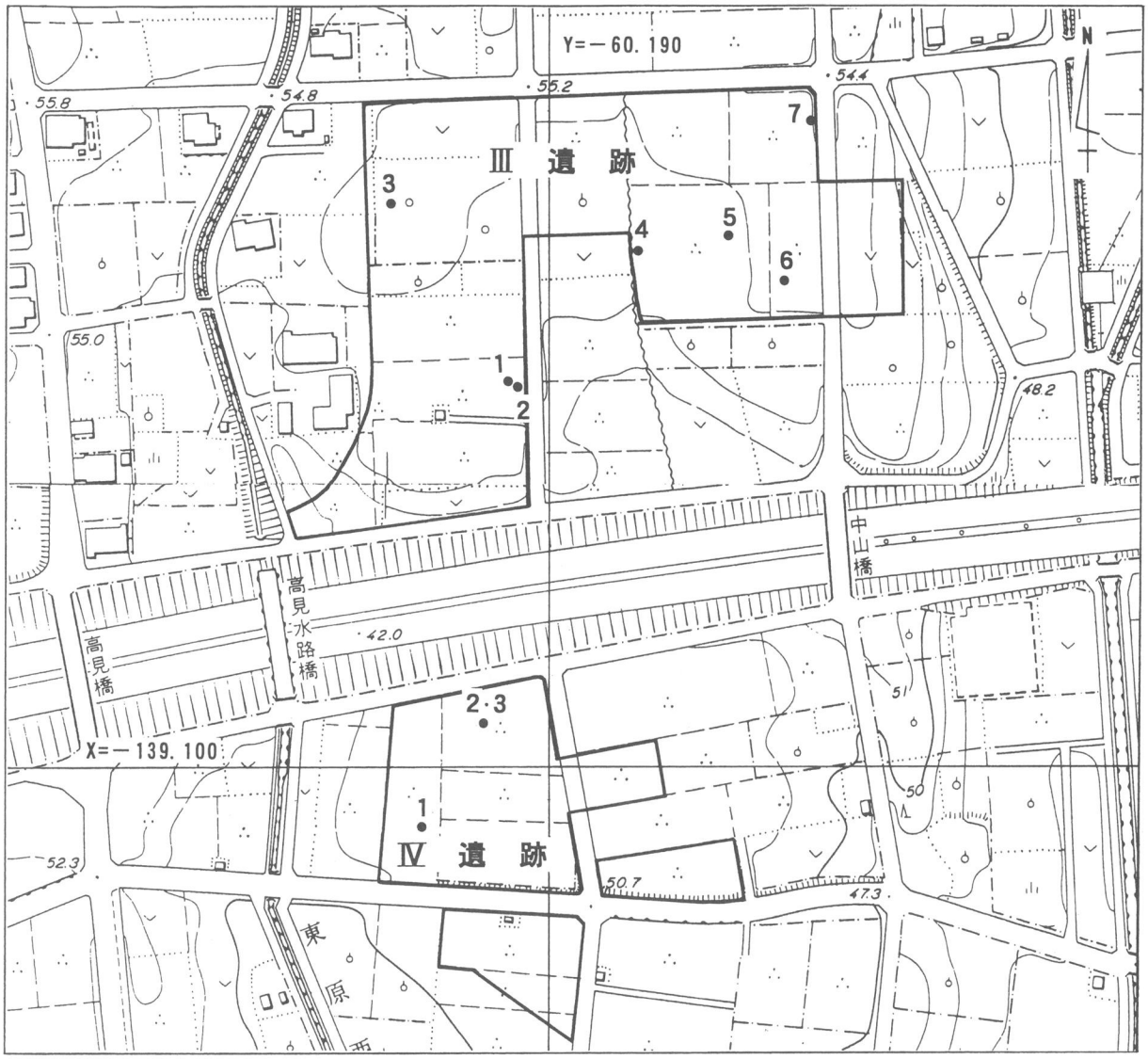
第50図　寺谷遺跡土坑平面・断面図（1/50）



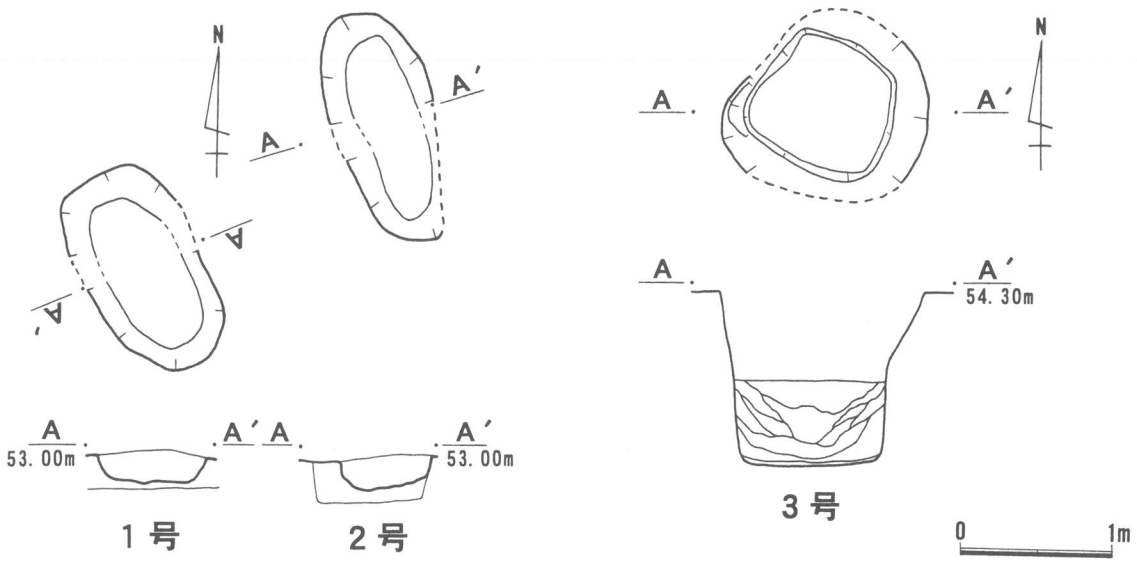
第51図　匂坂中下４遺跡土坑分布図（1/2,500）



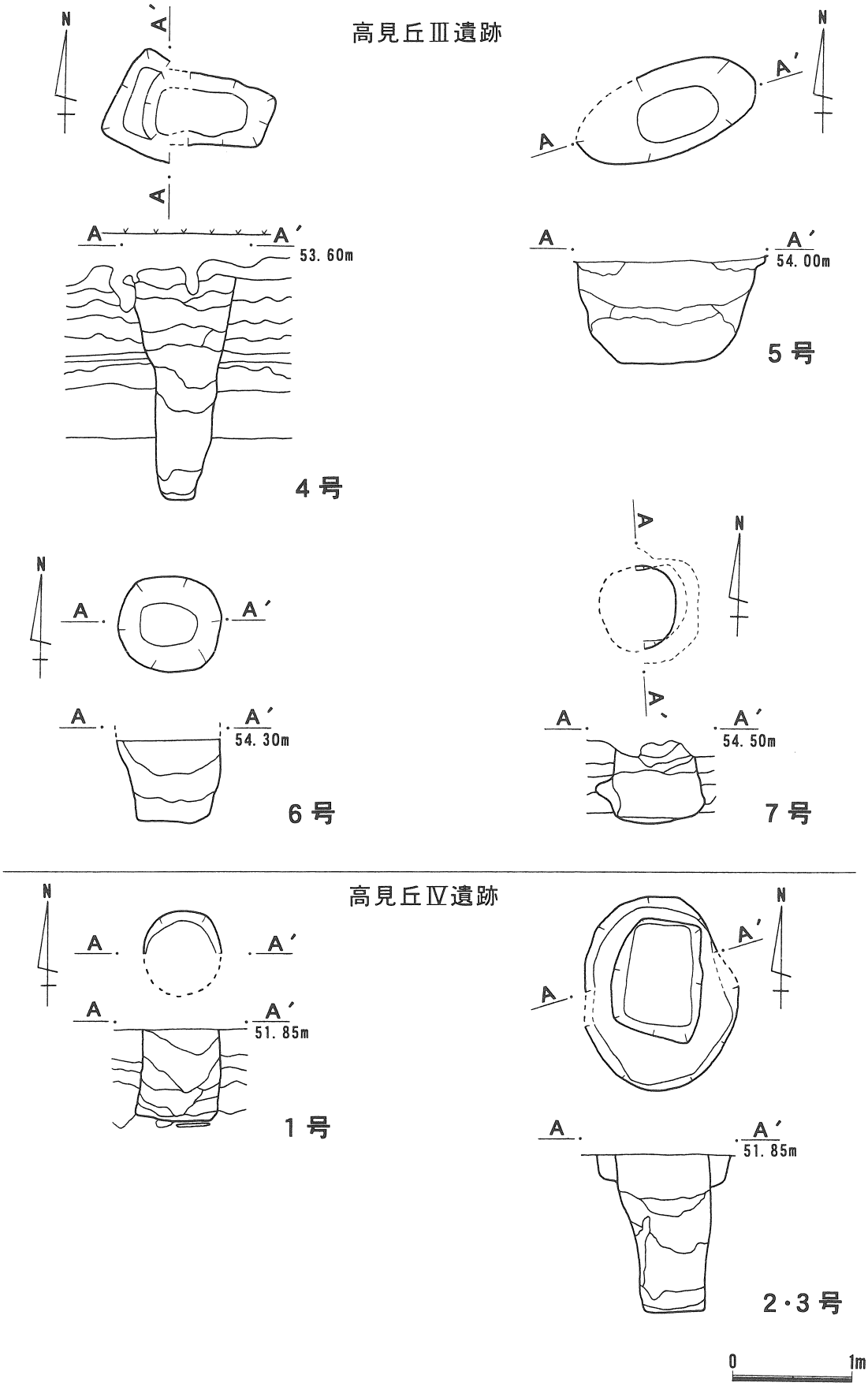
第52図　匂坂中下４遺跡土坑平面・断面図（1/50）



第53図　高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡土坑分布図（1/2,500）



第54図　高見丘Ⅲ遺跡土坑平面・断面図（1/50）



第55図　高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡土坑平面・断面図（1/50）

表12　静岡県下陥穴状土坑一覧表

遺跡名	所在地	時期	数	平面形	直径cm	深さcm	標高m	立地	特記事項
初音ヶ原	三島市谷田初音ヶ原	ＡＴ下	(29)	円形	(127)	(141)	100	丘陵	尾根を弧状に横断する一群と、不規則な配列の一群とがある。
下原	三島市塚原新田	ＡＴ下	7	円形	125	159	125	丘陵	弧状に並ぶ。ＢＢⅢ層から石器ブロック検出。
焼場Ａ	三島市川原ヶ谷字五百司	ＡＴ下	2	円形	118	133	130	丘陵	—
加茂ノ洞Ｂ	三島市沢地字河洞	ＡＴ下	17	円形	104	113	150	丘陵	２列並行に並ぶ。ＢＢⅢ層から石器ブロック検出。
八田原	三島市沢地字八田原	ＡＴ下	7	円形	148	134	140	丘陵	列状に並ぶ。
久根ヶ崎	田方郡韮山町奈古谷字久根ヶ崎	ＡＴ上	1	楕円・円	120	113	15	小台地	下部施設を伴う。
子ノ神	沼津市大岡字子之神	ＡＴ上	4	楕円・円	101	63	66	丘陵	休場層中に掘り込み面。
柏葉尾	沼津市大岡字柏葉尾	ＡＴ上	4	楕円・円	104	59	68	丘陵	—
広野北	磐田郡豊田町大字高見丘	ＡＴ上	17	楕円・円	99	76	49	台地	円弧状に並ぶ。覆土から尖頭器・細石刃等の石器のほか、炭化物が出土。
寺谷	磐田市寺谷	ＡＴ上	2	楕円・円	104	103	92	台地	覆土からナイフ形石器・剥片のほか、炭化物が出土。
匂坂中下４	磐田市匂坂中下	ＡＴ上	2	円形	102	161	72	台地	覆土から焼礫が出土。
高見丘Ⅲ・Ⅳ	磐田郡豊田町	ＡＴ上	10	円形・方形	70	70	52～55	台地	—

※直径は検出面における長径の平均値、深さは検出面から底部までの平均値を示す。
※初音ヶ原の数・直径・深さについては調査継続中であるため括弧書きで示した。

〈参考文献〉

（１）愛鷹ローム団研グループ　1969　「愛鷹山麓のローム層」『第四紀研究』８。
（２）池谷信之　1995　「愛鷹・箱根山麓の層序と出土石器」（『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』静岡県考古学シンポジウムⅨ）。
（３）小野眞一　1993　「先史時代の陥穴について―静岡県を中心に―」（『伊豆韮山カントリークラブ地内遺跡群』加藤学園考古学研究所）。
（４）前嶋秀張・鈴木敏中　1989　『初音ヶ原遺跡群Ⅲ』（三島市教育委員会）。
（５）武田英俊・芦川忠利　1995　『静岡県三島市文化財年報』第７号（三島市教育委員会）。
（６）小野千賀子・伊林修一・杉浦幸男　1995　『下原遺跡Ⅰ』（静岡県埋蔵文化財調査研究所）。
（７）笹原芳郎　1994　『焼場遺跡Ａ地点』（静岡県埋蔵文化財調査研究所）。
（８）横山秀昭　1996　『加茂ノ跡Ｂ遺跡』（静岡県埋蔵文化財調査研究所）。
（９）小野眞一・秋本眞澄他　1994　『久根ヶ崎遺跡』（加藤学園考古学研究所）。
(10) 石川治夫　1982　『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』（沼津市教育委員会）。
(11) 池谷信之　1996　『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』（沼津市教育委員会）。
(12) 山下秀樹編　1985　『広野北遺跡発掘調査報告書』（平安博物館）。
(13) 鈴木忠司編　1980　『寺谷遺跡発掘調査報告書』（磐田市教育委員会）。
(14) 佐口節司・室内美香編　1995　『平成６年度梵天古墳群・匂坂中下４遺跡発掘調査報告書』（磐田市教育委員会）。